
あなたは笑ってくれますか？

猫海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたは笑ってくださいか？

【Nコード】

N1963W

【作者名】

猫海月

【あらすじ】

浮気性の吸血鬼と一途で彼女のためならなんでも殺っちゃうぞな少女がバカップルしたりする、殺伐ほのぼのラブファンタジー同時進行にちびっことかが旅する話
嘘は何割？

狐って本当にお稲荷さん好きなんでしょうか（前書き）

間違っつて短編にしちゃったぜ！

初めましての方は初めまして

お久しぶりの人はお久しぶりです

連載始まりました！

近作…というか他全てですが世界観、キャラを他作品と共通してます
別に知らなくても問題はないと思います
では

人物表

エウナ

吸血鬼 初代主人公 主人公の癖に色々不遇な立場

楓

巫女さん 元祖ヒロイン的な位置 死んだりメイドしたり死んだり

巫女したり

狐って本当にお稲荷さん好きなんですか

「ボクが居なくても、あなたは笑っていてくれますか？」

月明かりの下、そういつて彼女は微笑んだ。

目を覚ますと、目の前に狐のお面があった。

お腹のほうに軽い重量を感じることから考えると、どうやら馬乗りになられているらしい。

「…」

見詰め合うこと数秒、そのお面は何を思ったのか私の顔目掛けて降下してきた。

「っー！」

すかさずお面へと炸裂する黄金の右腕、もとい右ストレート。

「っー！っー！」

謎のお面は緩やかに吹き飛び、壁に頭をぶつけて声にならない様子で悶絶している。

というか今の飛び方、絶対重力無視してるよね！？何時からコイツは自然の摂理を無視するようになったのかしら？

とはいえ、窓のほうを見れば日は暮れており、何時までも布団の

中で惰眠を貪る気も無い。そもそも眠くないし。
身体を起して軽く身だしなみをチェック。服の乱れは無いし、ど
うやら襲われてはいないみたいね。

「ほら、さっさと演技はやめて起きたら？」

「…ばれてました？」

「ばれてました」

どう見てもわざとっぽかったし。

「ぶーぶー」

そういつてそいつは立ち上がると、狐のお面を大切そうに壁へと
ひっかけた。…それ、私のなんだけど。

「おはようございます、エウナさん」

「今はこんばんわじゃない？まあおはよう、楓」

楓は大人とも子供にも見えるような不思議な容姿に黒くて長い髪、
そして何故か巫女服を着てニコニコと笑いかけてきている。

「ではではエウナさん」

「…」

そして彼女は私が立ち上がるのを見るや否や、両手をぐっと私の
方へと差し出してきた。

始まる静寂。止まる時。何？整列？

「…なに？」

「おはようのきゅー」

私はニコニコとした顔のまま手を出してくる楓。

ああ…なるほど。

そして私は彼女の元へと歩み寄ると、その細い身体を抱きしめた。

「ほらほらー、ぎゅー」

「ああっ！痛いです！だめえ！折れる！大切なものが折れちゃう！」

その後も笑顔で万力の如く力を込めていくと、やがて楓から何かを砕くような嫌な感覚がしてぐったりと崩れ落ちた。

崩れ落ちた楓はそのまま首をぐるりと180度ほど回転して私の方を見ると、ぱくぱくと喋り始めた。

「もー！酷いじゃないですか！本体なら死んでましたよ？」

「…お願いだからソレで喋るのやめてくれない？」

腰が砕け、首だけ回転してる人型が喋っている様子は、はつきり言っつてめちゃくちゃ気持ち悪い。

「腰砕いたのエウナさんじゃないですか！きちんと痛みは伝わるんですからね！」

そういうと、楓からしゅわしゅわと煙が出てきた。後に残ったのは人の形をした紙切れのみ。

その様子を最後まで見届けずに扉を開けると、そこには先ほどまで私の前に居た巫女服に赤いコートの少女が座っていた。

「何してるの？」

「こ、腰が痛くて立てないんですよ」
「そう、お大事にね」

地面に倒れる赤いコートに声を掛けると、そのままリビングのほうへと歩き始める。

「そんな！助けてくださいよー…」

後ろから聞こえてくる声は聞こえなかったことにして、さっさと行く。

元々家具の少ないリビングに置かれたソファに座っていると、廊下の方から何かを引きずる様な音が聞こえてくる。

時と場合によってはホラーにも見えるけれど、音の発生源は判りきっているし怖がることじゃない。

「うーらーめーしーやー…」

「あ、来たなら紅茶お願いね」

「ぶーぶー！」

楓はしばらくの間びったんばったんと騒いでいたが、やがて疲れたのかのそのそと動き始めた。

見るに耐えなくなつて目を逸らした場所にある、大きな一枚窓からは月明かりが差し込んできて、とても幻想的。

「紅茶の温度は熱帯魚ー」

台所から意味不明の歌が聞こえてくるけど、聞かなかったことにしよう…。

テレビも付けられないのでそのままぼーっと待つこと数分、湯気の立ち上るカップを二つ持った楓が戻ってきた。

「腰は平気？」

「ぶっ…じこしゅーぶくきのうを身につけたボクにとってこの程度の痛み！愛にしかありません！」

「そう、紅茶ありがとね」

「ぶーぶー！」

ぶーたられるのは本日何度目かしらね？

とはいえ、子供と面倒事は放置しておくに限る。

「子供じゃないもん！」

「…」

ぶつぶくぶーと膨らんでいく楓爆弾。私的には爆発までの秒読みが始まってないことを切に祈りたいところ。

とはいえ、そんなバカなやり取りをしている間にも紅茶は冷めていく。美味しい間に飲んで上げるのがせめてもの手向け何だけど…。

「ねえ楓？」

「んー？」

「紅茶に何か入れた？」

「何も入れてないですヨー？」

「…そう」

どうして目を逸らすのかしらねー？

とはいえ、本人が何も入れてないと言うのだからこれ以上の追求は無駄でしょう。

カップに手を伸ばす。楓が逸らしていた視線を私のカップへと向けた。

匂いは…変わらない。そんな初歩的なミスはしていない様子。

中身の紅茶に口をつけると、楓の目が輝いたように見えた。その輝きは…まるで悪戯が成功した子供のよう。

「んんっ!?!」

なので、とつさにカップから口を離すと楓にキスをする。そのまま舌を使いながらゆっくりと、溢さないように紅茶を口の中へと移動させれば、楓は目を白黒させながらも受け入れた。

口を離すと、月明かりに銀色の糸が二人を繋いだ。

「…いきなりですね」

「あら、きちんとした方がよかったです」

そのまま見詰め合って沈黙する。やがて、赤い顔の楓がこくりと頷いたのを確認してから、抱きしめるとキスをする。今度はさつきよりも長く、ゆっくりと。

「満足した?」

「はい…」

彼女からしてくるかすかな血の匂いに意識が惑わされそうになったので、ゆっくりと身体を離す。

それにしても…おかしいわね。

とろん、と蕩けた様な表情の楓を見つめながら一人首をかしげる。薬が入っていると踏んだのだけれど、時間が経っても見た感じに変

化は出ない。後考えられることがあるとしたら吸血鬼限定の薬だけ……そんなものがあるって言うのは聞いた事は無い。元から薬が入っていないという可能性は断じて考えていない！

「ねえ、楓？」

「ん……？」

「紅茶に何入れたの？」

逃げないように片手で抱きしめながら聞くと、何処か夢現だった楓の眼に光が戻ってきた。

「それは言えないですね！」

「へえ、入れた事は否定しないのね？」

「あ……」

悪戯がばれた子供の様な顔をした楓に優しく微笑みかけると、彼女もまた全力で誤魔化すかの様な笑顔をした。

すかさず放たれる黄金の右腕。すなわちアツパー。

しかし彼女は素早く私の拘束から逃れると、人とは思えない速度で後ろに倒れこんで回避した。

リビングの中に何かが頭をぶつけた鈍い音と腰を痛めたかの様な嫌な音が響く。

「っー！っー！」

声にならない様子で腰を抑えながら地面を転げまわる楓。痛いのはぶつけた頭か……それとも腰か……。

そんな彼女を冷めた視線で見下ろしていると、ふと違和感に気付いた。

よく見れば、彼女の頭の上には黄金色の何かふさふさとした物が

生えている様に見える。

やがて楓も自身の身体に起こった違和感に気付いたのか、ぴたりと動きを止めると頭と腰に手をやっている。

これは…どう見ても耳よね？ソレも狐の。いや、狐と犬の違いとか良くわかんないけれど。

「かえ…で？ソレ…？」

「そんな…」

「戻し方は？」

「そんなものあつたらエウナさんに生やせないじゃないですか！」

叫んだ拍子にまた腰が痛くなったのか、びったんばったんと暴れているが今のを聞いて助ける気にはならないわね。

…とはいえ、そのふさふさの耳には興味が沸いて来る。でも素直に助けるのは何だか嫌だ。

そこでふと、私の頭に妙案が閃いた。

「ほわ！？」

私は素早く楓の視界の外へと消えると、その身体を後ろから捕まえて持ち上げて、ソファへと向かう。

「…ソレはどういうことですか？」

「まあまあ」

「んー…」

私の膝の上で不満そうにしている楓を宥めながら片手で頭を撫でると、彼女は気持ちよさそうに声を漏らした。

「…じゃないです！どうしてボクを乗っけてるんですか！」

「まあいいじゃない！」
「よーくーなーいー！」

はーなーせー！と騒いでいる楓を抑えながらも頭を撫でる。

「ところであなた、怪我でもしてるの？」
「んー？してないですよ？」
「…そう」

彼女から発せられる血の匂いに思わず食指が動きそうになるが、
何とか我慢する。

「食べたいんですか？」
「…コレでも吸血鬼だからね」
「いいですよ？」

彼女のうなじから覗く白い首はとても美味しそうで…。

「…いえ、やめとくわ」
「ふむふむ」

流されそうになる理性を何とか抑える。コレでも好きなものは最後に食べるタイプなの。

「エウナさんエウナさん」
「んー…？」
「月が綺麗ですね」
「ええ、本当にね」

そのまましばらく、彼女の冷たさや柔らかさを感じていると急に

眠気が襲ってきた。

「エウナさん？眠いんですか？」

楓に返事をしようとするも意識は段々と闇に塗りつぶされていく。

「おやすみなさい、せめて幸せな夢を……」

楓からした声を最後に私の意識は途切れた。

狐って本当にお稲荷さん好きなんでしょうか（後書き）

はい、とりあえず1話です

だらだらとやっついていきますが、最後までお付き合い頂けたら感無量です

今度こそ完結させるぞ！

では、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

大切な場所（前書き）

第2話です

ちなみに3話目からはそんなに早く書けない！

人物表

エウナ

吸血鬼 ヘタレの称号を獲得するのは主人公の特権ですよね！？

楓

巫女さん 話をややこしくすることに定評のあるヒロイン的立ち位置な人

ミツキ

クラゲです 少し変でもクラゲです 女の子になれるけどクラゲです

アリス・イン・ワンダーランド

魔術師 恋人は女の子 本人も女の子

大切な場所

「エウナさんは別の世界に行ってみたいか思っただことありますか？」

「何？ついに成仏したくなったの？」

「いえいえ、ここまで来たらそう簡単に成仏しないですよー。あ、ソレ取ってください」

「ソレってドレよ。私は現状のまま満足かしらね…何よその顔、文句あるの？」

庭に面している大きな一枚窓から月明かりが差し込む部屋の中に、私がページをめくる音だけが静かに響く。幸い、起きたときにはすでに楓はいなかったから、この静かな時間を精一杯満喫することにしましょう。

そう決めると『不思議の国のアリス』のページをまた一枚とめる。

それにしてもこの本、ギャグなのかジョークなのかよくわからな言い回しが多い気がする。…何か楽しみ方でもあるのかしらね？

とはいえ、今日は満月。些細なことは気にせず海のように広く谷の様に深い心持で気にしないことにしましょう。

そう決めてからテーブルの上にセットされていた紅茶を飲んで一息入れていると、窓から差し込む月明かりが昼間の如く明るくなり、ガラスの碎ける音が辺りに響き渡った。そして視界の端からこちら目掛けて突っ込んで来た黒く大きな影。

そのままそいつは、速度を落とすこともなく私を殴り飛ばしてきた。

とつさの判断で不完全ながら受身だけは取ろうと身体を捻らせる
と、私がぶつかつた食器棚から食器が落ちて割れる音が何処か遠く
から聞こえてくる。

肋骨が数本折れたのか少し呼吸が苦しい中、突然の突っ込んでく
るや否や殴り飛ばしてきた素敵な来訪者のことを観察する。

警戒する様にこちらを見ているそいつは、同じく図太い図体に付
いた太い手足、そして爪に尻尾に牙に翼と、何処かで見たことある
ような形。

というより、どう見ても竜なんだけど…家の修理費は誰が払うの
かしらね？

私が竜を一体売るといくらになるのか考えていると、そのでかい
図体の後ろから今にも火を噴きそうな細いへびみたいな竜が見えた。
それはもう、口から少し漏れるくらいに発射数秒前。

どうやら窓ガラスを壊したのはあつちみたいね…。とはいえ、さ
ほど広くは無い家中、さらに後ろにあるのは台所に倒れた食器棚。
アレの威力はわからないけれど、ぶち込まれたらそうそう避けれる
物でもないでしょう。

ということでも全速力で前へと走り、強行突破を狙うことにする。
私はでかい竜がなぎ払う様にして振った爪をかがんで避けると、
すれ違い様に回転を加えた裏拳を叩き込む。

鈍い手ごたえの中、庭のほうを見れば、竜の真上から奇襲を掛け
た楓がこちらに撃たれるはずだった炎弾で迎撃されているのが見え
る。

私はそのまま速度は落とさずに庭先まで走りこむと、吹き飛んで
いる楓を捕まえながらその場から飛び去った。

遠く眼下に街の明かりが見える頃、もう大丈夫でしょうと結論付けると飛ぶ速度を落とす。変なのに絡まれた上に、飛ぶのは苦手だから余計に疲れた…。

「…大丈夫？」

「とつさに防ぎましたけど、骨が数本やられました。上に目でもあるんですかね？アレ」

「そんな奇妙な生物には見えなかったけれど…というより骨が折れてるなら、そんなに力入れないほうがいいんじゃない？」

「エウナさんへの愛のぱわーで傷も治る治るー」

「…」

お姫様抱っこの格好になっている楓聞くと、彼女は嬉しそうに狐耳をぴくぴくと動かしながら血の香りをする身体を押し付けてきた。そして、傷が痛むのか少しだけ顔をしかめた。

傷が治るところか深くなってる気がするのだけれど…もしも彼女が抱きつくのをやめると、こちらの手間が余計に掛かることになるので何も言わないことにする。

「夜風は…寒いですね」

「ええ、そうね」

生ぬるい風が私のドレスと楓の赤いコートを軽く揺らし、もうすぐ熱気の終わりを知らせてくる。

「ところで、これからどうする？」

「ん、んー…とりあえずほとぼりが冷めるまで街外れの森にでも行きましょっか」

「そうねー」

そう決めるとしたらだと方向を修正する。
何故襲われたのかも判らず逃げる日々。惨めね…。

「愛の逃避行ですね」

「…」

いつそ落として全てなかったことにしてしまおうか？

その考えを実行に移そうか真剣に悩んでいると、私の真横をついさつき見たことあるような炎弾が通過していった。

後ろを見ると、これまたどこかで見たとような大きいのと細いのが追ってきており、竜の影から銀色の髪がちらりと見えた。

「ちよつと！まだ追ってくるの！？」

「わお、意外としつこい人なんですね」

「あんだ魔法使いでしょ？何とかしなさいよ！」

「無理ですよ…向こうは本職の魔術師なんですから…」

「ん…？」

楓の言葉に少しだけ疑問が出来たが、びゅんびゅんと後ろから飛んでくる弾に意識を持ってかれて消え去った。

「エウナさんこそ何か出来ないんですか！真後ろから直撃コース2発！」

「地に足付かないと安定した暮らしは遅れないのよ！」

「幸せ家族計画ですね！フェイント1発進路そのまま！」

「私は子供は嫌いよ！」

「嫌よ嫌よも好きのうちですか！エウナさんが望むなら私…！3発下に回避！」

「突き落とすわよ！」

二人とも何を言っているかもわからない中、避けたと思った炎弾の1つが私の真上で爆発した。

「しまっ…」

抵抗する間もなく、私たちは爆発に巻き込まれ落ちていく。

目を覚ますと方足に激痛が走った。見ると変な方向に曲がっており、どう見ても折れてる。

とりあえずコレでは歩けないので、折れてる足を両腕で持ち力と気合を込める。

「っ…」

とりあえずまっすぐに戻した足がくつつくまで動きようが無いので辺りを見渡すと、どうやら森の中に落ちたらしい。どうやら気を失った時間は長くない様子。

高さの割に傷が浅いのは木々がクッションにでもなったのか。

そこでやけに静かなことに気づき、慌てて楓の姿を探すが見える範囲にはいない。

まだ鈍痛がする足で辺りを探すと、そこには地面に倒れている楓が居た。

「楓!？」

「エウナさん…? えへへ… ちょっと… 歩けそうに… ないです」

浅い呼吸を繰り返しながらも微笑む楓の手は変な方向に曲がっており、胸に刺さった枝が赤黒いコートの中で巫女服を赤く染めているのが見える。

とにかく夜の森は拙い。安全なところに行かないと何が出るかわかったものじゃない。

「エウナさん…近くに教会があるので…そこまで運んで行って…くれませんか？」

「ええ…」

なるべく衝撃を与えないようにしながら、彼女が指し示す方向へと歩いていくと、古ぼけた教会が見えた。

扉を開けると古ぼけた机やイスは端のほうに積まれており、教壇らしき物と大きな十字架が見える。

それにしても…私が教会に逃げ込む日が来るとは…ね。

「付いたわよ」

ちょうど中央辺りに楓を下ろすと、彼女は閉じている目を開けて微笑んだ。

「枝…抜いてくれますか？」

「…いいの？」

「そっこのほうが…治りが遅くなるじゃないですか…」

彼女の言うとおりにずぶずぶと枝を抜くと、そこから赤黒い血が溢れ出てくる。

「ありがとうございます…」

彼女がそう言った時、教会内に微かな風が吹いた。扉は閉まっております。ここで風が吹くはずは無いのに。

「コレは…?」

「ばれた…見たいですね…ミツ…キ…!」

楓がそう言うと、ふよふよと何処からかクラゲが飛んできた。

クラゲは2、3ほど触手を動かして楓の身体を触った後、ゆっくりと上へと飛んでいった。

「まったく…」

楓はクラゲの方も見ずにゆっくりと立ち上がるとペンダントを振って短刀にし、呟いた。

「世知辛い世の中です」

突如ドアが吹き飛んで炎弾が迫ってくるが、炎弾は私たちに当たる前に見えない壁の様な物にぶつかり爆発した。

そして私はその爆風から突っ込んできた大きな影を殴り飛ばす。

後ろでは炎弾が何度も爆発する音が響く中、追撃を入れるために駆け出す。

竜が繰り出してきた尻尾を片手で受け止めながら、その腹に拳を叩きこむ。尻尾を受け止めた骨がミシリ、と鳴る音と何かを砕く手ごたえ。

「エウナ…さん…!」

楓の声に反応して後ろへと下がるが、炎弾はすぐ近くまで迫って

きており爆発した。何とか直撃は逃れるも吹き飛ばされる。

すぐさま近づいてきた竜の腕を受け取めると、そのままお互いに動けなくなった。

とはいえ…馬鹿力を負傷した腕で受け止め続けるのは…結構辛いわね。

頼みの綱である楓の方では未だに炎弾が止んでおらず、見るからにふらふらとし始めて今にも倒れそうな様子。

すると突如弾は止み、ドアから銀色の髪が走り込んできた。

見た目はワンピースを着た少女といった所だけけれど、手に杖を持つて銀色の髪をなびかせているその顔は何処かで見たとあるような…。

「くっ…！」

少し気を抜いた瞬間に目の前の竜の爪が迫ってきたので力を入れ直す。

銀色の少女は楓まで一直線に走りぬくと、振り下ろされる短刀を下から杖で弾いてそのまま叩き付けた。

「楓！」

カランカランと弾かれた短刀が鳴る中、私の横目では細い竜がこちらへと炎を吐こうとしている様子が見える。

しかし、どうせ貰うなら相打ちまで持っていこうと思った瞬間、目の前の竜がゆっくりと崩れ落ちるのが見えた。

その後ろからは刀を突き刺している水色の髪の少女が見える。

『ロック…我が名の下に命ずる』

巨体に潰れそうになっている間、小さく呟くような声が聞こえて

きたような気がしたかと思うと、細い竜は結界の中で自爆していた。そして、倒れていた楓は銀色の少女に馬乗りになってその細い首を絞めており、このままだと確実に殺すでしょう。

「楓！ダメ！」

私は叫ぶと倒れこんでくる巨体をどけて彼女へと駆け寄り、その冷たい身体を抱きしめる。

「もう大丈夫だから…だから帰って来なさい…」

荒い呼吸を繰り返している彼女を抱きしめて何度か囁くと、呼吸が少しずつ穏やかになって崩れ落ちる様にして眠りについた。

「まだ生きてる？」

楓をゆっくりと寝かせてから、動かない少女へと問いかける。

少女は銀色の長い髪に薄い藍色のワンピースを着ていて、こうしてみると探せばいそうな不思議な子にしか見えない。

「…殺さないんですね」

「その話は追々するとして…今は火を付けましょうか」

どつやら生きていることを確認すると立ち上がる。

「…寒いでしょう？」

ぱちぱちと廃材が燃える音が響く。火はミツキが付けた。決して摩擦で起そうとか花火で付けようとかの挑戦はしていない。

そしてミツキは火をつけた後またクラゲの姿になると、ふよふよとどこかに飛んでいった。

「…それで、どうして生かしたんですか？」

しばらくの間、燃えている焚き火を見つめていると少女が言った。

「まるで生きてることが不満みたいな言い方ね」

「もしも晩御飯になるのが理由なら、生きてるのは嫌ですから」

「ふーん…」

そういう捉え方もあるのか。というより、そういう捉え方が出来る様な経験をしたことあるのね、この子。

「まあ、食べるつもりは無いわよ。生かしたのはただ答えて欲しい事があるから」

「答えたら別世界までの片道切符の発行ですか？」

「それは答え次第ね」

すると、彼女はくすくすと笑った。

「いいですねー」。

私が答えれることで良ければ答えましょう」

「そう、それじゃ早速…何で私たちを襲ったの？」

「…」

「…」

私がそう聞くと、彼女は何処か上の方を見たりして落ち着かなくなつた。

「…えーと」

「どうかした？」

ものすごく微妙な空気が流れる中、焚き火のぱちぱちとした音だけが響く。

「えーと…ですね…その…」

視線を合わせようとせずにはちらちらとこちらを見てどうも忙しい。その様子はまるで怒られそうな子供の様。

「何よ、怒らないから言ってみなさい」

「その…あの家が大切な人の家です…それで…勝手に住まれてて少し頭に血が上ったと言いますか…その…ごめんなさい」

そしておどおどと上目遣いでこちらを見てくる。

…つまり、そういうことね。

私がゆらりと立ち上がると、何を思ったのか彼女はビクツと体を震わせた。

しかしそのまま楓の元まで行き、ゆっくりとその体を持ち上げる。

「ねえ楓？」

「…」

眠った振り続ける楓に優しく語り掛ける。

「あそこ見つけたのあなただったわよね…知ってたの？」

「……」
「何も答えないって事は勝手に解釈していいってことよね……?」
「…シ、シラナイヨ」
「本当に?」
「…ホ、ホントダヨ」
「…」
「…」

ゆっくりと楓の足を焚き火に近づける。

「熱！熱いです！燃えちゃう！こげちゃいます！」
「知ってたの？」
「ダメ！ミディアムになっちゃいます！」
「答えて欲しいなー？」
「答えます！答えますから！」

楓を降ろすと、ばたばたと靴を脱いで素足になった。

「…怒らない？」
「怒る…でも言わないともっと怒る」
「…し、知ってました」
「そう…」

私は静かに呟いて彼女の体を抱えると、そのまま投げ飛ばす。

「知ってたのなら最初から言いなさいよ！」
「あーねー」

ゆっくりと地面に落ちてからわざとらしくぴくぴくと動く楓を尻目に、少女へと向き合う。

「知らないこととはいえ、悪い事したわね」

「…怒らないんですか？」

「結果として誰も死んでないんだし、別にいいんじゃない？」

私がそういつて笑うと、彼女は少しだけ悲しそうな顔をした。

「…お人好しなんですネ」

「ええ、昔言われた…わ？」

『エウナさんはお人好しですねー…』

突然誰かの声が聞こえたかと思うと、軽い頭痛に襲われ思わず頭を抑える。

誰…だっけ？

「どうかしましたか？」

私の目の前で銀髪の少女が首をかしげている。

「いえ…ねえ、私たちって何処か出会ったことある？」

「会ったこと…ですか？」

んー、と考えている彼女を見ている間も頭痛は収まらない。

「たぶん無いと思いますよ？」

「…そう」

それじゃ、あの声は…何？

「エウナさん…」

声がする方を見ると楓が真剣そうな顔をしている。

「…ボクがこっそり混ぜたクマさんパンツ、履いたならちゃんと見せてくれないとダメじゃないですか！」

夜の教会に打撃音が響き渡った。

「…」

「あ、あのー…？」

「…何？」

「ひっ！」

彼女を横目で見ると、怯える小動物みたいな顔をされて少しへこんだ。

「も、もしよろしければ…家に来ませんか？」

「…いいの？」

「はい、私的にはあの家にさえ居て貰わなければ構いませんから…それに」

彼女はそこで切ると床で沈黙している楓のほうを見つめる。

「聞きたい事も…ありますから…」

その時の彼女は、何故だかとても幻想的に見える。

…そういえば、名前なんて言うのかしらね？

「ねえ楓？」

「んー？」

「私たちの他に誰か一緒に暮らしてなかった？」

「んー…」

引越しのための荷造りから顔を少しだけ顔を上げて楓の方を見ると、彼女は少しだけ目を伏せた気がしたけど、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「きっと勘違いですよ」

「…そう」

その後、二人とも会話もなく黙々と荷造りをする中で、彼女が目を伏せた時に見せた表情が少しだけ気になった。

大切な場所（後書き）

バトル回っぽいのだよ！

関係ないですが後書きに書くことが思いつかない！

ということでも楽しんでいただけたら幸いです

くるくる回ってすってんてん（前書き）

小さい猫がにゃーにゃー鳴いてる夢を見た。

片手で持ち上げながら撫でると猫パンチしたり目を細めたりしてとても可愛かった。

目を覚ますとそこには片手じゃ持てないほどまん丸太った毛玉がいた。

毛玉「餌まだ？」

人物表

エウナ

吸血鬼 金髪ロング ドレス 記憶力皆無

楓

魔法使い 長い黒髪を後ろで束ねる 赤いコートの巫女さん 第1話で名前を間違えられました

アリス・イン・ワンダーランド

魔術師 銀髪ロング わんぴーす 恋人は女の子 本人も女の子

ミツキ

クラゲ ミズクラゲ そういえば詳細設定一番不明ですよ

くるくる回ってすってんてん

「そういえばあなたって喋れないの？」

(ふるふる)

「ふーん、喋れないわけじゃないんだ」

(…「くん」)

「…」

(…)

「…喋りたくないならソレでもいいけど、色々と不便じゃない？」

(ふるふる)

「まあ、あなたがそれでいいならいいけど…というより、あなたと話していると独り言みたいね」

(…)

「そんな困ったような顔しないで。ほら、乾杯しましょう」

カチン。

雲の間から差し込む月明かりが照らす草原を、二人の少女がくるくると回っている。片方は赤色、もう片方は水色の少女たちは優雅に近づいたり離れたりを繰り返しており、まるで二人でダンスを踊っているよう。

しかし少女たちの手には、長さこそ違えどそれぞれ刃の付いた獲物があり、そうしてみると優雅な踊りも殺伐としてくるわね。巫女服を着た方の子は動きの中に打撃も織り交ぜているから、余計に。

そんな光景を肴にしながら一人ワインを飲んでいると、軽い衝撃と共にやわっこいものが背中を襲い掛かってきた。

そしてその衝撃の元凶は離れるどころか、前へと腕を回して来て離れる気がないことを無言で伝えてくる。

「…何してるの？」

「んー、抱き心地が良いかどうか気になったもので…意外と暖かいんですね」

衝撃でずれた位置をお面を直しながら、サラサラと肩に掛かって来る銀髪へと問いかけてみるも、当然ながら返事は私の頭の後ろから来た。髪が返事したら怖いけど。

「で、どう？」

「ルカさんの方が良いですねー」

「…」

誰よ、それ。

私が未知なる誰かに負けたことについて考えている間も、アリスは私の背中から離れずに抱きついたままだった。それにしても軽いわね。

「あなたちゃんと食べてるの？」

「…」

「…もしもし？」

「ん？んー…？ちゃんと食べてますよ？」

…今寝てなかった？

とはいえ、きちんと食べてるのに子供みたいな体にしかならなかつたのね。

「む、なにやら失礼な事考えてません？」

「気のせいよ。そういえば仕事は終わったの？」

このまま追求されると苦しくなりそうなので、視線を髪から戦つてる楓たちの方へと向けると話題を振る。い、今楓と目が合ったよ
うな…。

「まだですけど、後は待つだけですからねー」

「へえ、随分と雑なのね」

「最近の生態調査なんてそんなものですよ。探知魔法使って待つだけー」

「ふうん…」

頭の上にくりぐりと押し付けられるあごを感じながらワインを注
ごうとすると、突然横から伸びた手がボトルを取り去っていった。

「手酌は出世できませんよ」

「…何に出世するのよ」

「んー…魔王ですかね？」

「それなら出世できなくて良いわね。あなたもどう？」

「私はいいです。お酒呑めないのです」

「そう…」

とくとくと目の前で告がれていくワインに気を使いながら問いか
けてみるも、返ってきたのはつれない返事。いい加減一人で呑むの
も寂しくなってきたのだけれど、しょうがない。

再びグラスに満たされたワインは赤黒い色をしており、まるで血
のよう。そういえばパンは肉らしいけど、ワインは水か血かどつち
だっけ？

ぼーっとどうでも良いことを考えていると、楓が短刀を弾かれ、
戦いが決した様子が見えた。雲の切れ間から差し込む月明かりを受

け、銀色に輝いた短刀がくるくると回って飛んでいく。

「何者なんでしょうね？」

その様子を眺めていたら頭の上から声がした。

「…どつちが？」

「えーと…」

視線の先で、今度は2メートルほどはあるムキムキな石像が本人たちの代わりに戦っている。ただし、片方の像は下半身しかないしもう片方は上半身しかないの、その戦いはとてもシニール。という知らない人が見たら黙って目を逸らす光景。

「ク、クラゲさんの方です」

「ああ、あっち」

下半身側の少女…名前なんだっけ？は謎の石像対決が始まるや否や、少女の姿をやめて普段のクラゲへと戻っていた。

「そっいえばアレって何なのかしらね…楓の使い魔じゃないの？」

気が付いたら居たような気がするし。

「使い魔じゃなさそうですが…それよりもエウナさん知らなかったんですか!？」

「知らないわね…そんなに変なの？アレ」

見れば下半身が己の機動力を生かして上半身の後ろを取り、執拗に蹴りを入れている。上半身は何とか腕を回して対抗しようとする

も、悲しいことに足がないから移動すらも上手くできていない。どう見ても勝負にはならない光景なのだけど…何で上と下で2つに分けたのかしらね？

しかし下半身側も蹴りを入れるたびに軽く飛び跳ねて居るのは衝撃が強いのか、それとも痛いのか…どちらにしても意味不明な戦いであることに変わりはないでしょうけど。

「…あなたの竜も同じ様なものじゃない」

「あの子達と一緒にしないでくださいよ！」

余りにも見られないので空を眺めながら呟くと、悲しいことに聞こえたのか、アリスがぼこぼこ頭を叩いてくる。別に痛くは無けれど、衝撃でお面がずれるずれる、ワインが零れる零れる。

「わかった、わかったから叩くのをやめなさい。投げるわよ？」

「魔法にも出来ること出来ないことがあるんです」

頭上からの襲撃も止むと、地へと散っていった儂きワインたちの補給をしながらアリスが言った。

「そうなの？」

「はい、それぞれちゃんと制約があつてその制約の範囲内の事しか出来ません。簡単に言うと、水辺の近くで火を使うのはかなり難しいです。

クラゲさんみたいに自由に姿かたちを変えたり出来るというのは見たことも聞いたことも無いですね」

「つまり？」

「禁術、もしくは古代魔術ってことです」

「…」

…あのクラゲってかなりすごかったのね。というかアレはクラゲなのか人なのか

「魔法って便利そうに聞こえるけど、意外と不便なのね」

「まあ…何でも出切るわけじゃないですが選択肢が増えるのは良いことですよ。こういう仕事の時とか、焚き火するときとかも便利ですよ」。

「要は使い方次第ですよ使い方」

背後例の如く後ろにへばりつく魔術師はそう結論付けると、また私の頭の上にあごを乗せて全てをゆだねる体勢。少し熱気の残る夜の上、後ろに体温上昇要因があるのでたまに吹くそよ風が心地よいふと、先ほどの戦いの続きを見れば上半身が体ごと腕を回転させて空へと飛び去り、下半身はその脚力でジャンプを繰り返して白熱した空中戦を繰り広げていた。

「……アレは魔法なの？」

「……どうなのでしょうね」

雲の間から覗く星空に舞う、片方は上半身だけ、もう片方は下半身だけの2つの筋肉。飛び散る石片、絶え間なく続く岩と岩がぶつかる音。華々しく両腕を回して天高く上っていく上半身の姿は、何処か輝いているようにも見える。そのまま墜落して地獄にまで落ちる。

「そういえばアリス？私のドレスの洗濯のことなんだけど・・・」

「そろそろ休憩も止めにして働きに行かないと！」

アリスはわざとらしくそう言うと、私の話を最期まで聞かずに走り去っていった。

・・・逃げたわね。

「えーうーなーさーんー」

ようかいみこがあらわれた。

「つーかーれーたー」

ようかいみこのだきつき、わたしはつかまってしまった。

「つーかーれーたーのー！」

「・・・」

楓は私の腿の上で同じ言葉を連呼している。むしろ憑かれたのは私の方なだけ。

それにしても、一体私に何を求めてここに來てるのかしらね？生憎と疲れを癒す方法は全く知らないのだけれど。

「ワイン飲む？」

「ちゅー？」

うん、全て無かったことにしようそうしよう。

そう結論付けると片手で彼女のほっぺを伸ばして遊ぶ。おおー、まるで餅みたい。

「いひゃい、いひゃいどす」

そうしてしばらくの感触を堪能していると、やがて捕まっていた手を話して抵抗し始めたので渋々手を離す。

「むー、伸びてないですか？」

「よく伸びる良い子に育ちなさい」

「憤ましい淑女に私はなりたいです」

「それは・・・難しそうね」

「何で何でー！」

寝転がったままびつたんばつたん暴れだす楓。そういつとこを直さない限り淑女はありえないでしょうね。

「そういえばあのクラゲは？」

「ミツキですか？あの子なら飛んでつた石像を探すとかで何処か行きましたよ」

「・・・アレって探さないといけないものの？」

「後始末はしっかりするように言われてるらしいです」

「・・・そう」

ホント、変なところで律儀なクラゲね。

「そういえばアリスさんはまだお仕事？」

「あー・・・アリスね・・・」

そこで切るとアリスが去っていった森のほうをチラリと見る。

「アリスならほとぼりが冷めるまで森の中で大人しくしてるんじゃない？」

「それはそれは・・・世知辛い世の中ですね」

「ええ、ホントにね」

ワインの染みは取り辛いし、この服どうしようかな。

そうこうしてる間に眠くなってきたのか、楓はうつとと目を閉じ始めた。

「眠いの？」

「んう……」

眠たそうにしている彼女の頭を撫でれば、黄金色の耳がぴくぴくと動いて少し面白い。

しばらく月と雲と星空景色を肴にワインを飲んでいると、下から微かな眩きが聞こえてきた。

「森の中で……綺麗な人を……見たんですよ……」

目を向けると寝ぼけているのか、楓は誰かに向かって話しかけるように言っている。

「金髪の……綺麗な人でした……」

「そう」

私はぽつりぽつりと眩かれる言葉に相槌を打ちながら、一人空を見上げる。

「いつか村を出たら……色々見て回るの楽しみですね……」

聞きなれない名前に反応して彼女の方を見ると、目じりから水滴が流れ落ちるのが見える。

その何かを指先で軽く拭くと、突然楓は目を覚ました。

「・・・？」

「良い夢は見れた？」

「氷華・・・ちゃん？」

ふふ、まだ寝ぼけてるのね？この子は。

「あ・・・」

「んー？どうかした？」

「え、えへへー・・・」

私がつこりと微笑みかけると、楓も引き攣った笑顔で応えた。

「ねえ楓？」

「な、何ですか？エウナさん」

「だーれと間違えたのかしらー？」

「なな、何のことでしょう？」

目が泳いでるわよ？

どうやらシラを切る様子なので涙を拭いた手を反転、全力で楓の頬を突付く。・・・おお、これは意外と癖になりそうな感触。

「さ、刺さっちゃいます！刺さってますって！」

そのままつんつぷにぶにとしているると、本格的に楓が暴れ始め、私たちの間で静かな戦いが始まった。

でも噛み付かれて指先の危機を感じたので数秒後には終戦した。
・・・何でこうなったんだっけ？

「ねーねー、エウナさん」

「ん・・・？」

こうなる経緯を思い出そうとするにも、思い出せるのは楓のもち肌のみ。・・・今度機会があったらまた狙ってみよう。

「目覚めのちゅーは？」

「地面としたい？」

「ぶーぶー」

天使の如き微笑で返すも徐々に膨れていく楓の頬。・・・はあ、しょうがないわね。

私は一つため息を付くと周りに人影が無いか見渡し、そっと彼女へと顔を近づけた。

暗い森の木の陰で、その一部始終を見つめている少女がいた。

少女は長い銀色の髪に藍色のワンピースを着ており、木の陰でぶつぶつと何かをいつている姿はとても怪しく見える。

「パ、パル・・・いえコレは拙いですね・・・それにしても妬まし・・・」

とても、怪しく見える。

「ダメです私！山田たいちよーも言ってたじゃないですか！」

アリスは自身を鼓舞するようにして一人呟く。ちなみに、とても

怪しく見える彼女だが、幸い周りに人はいない。

実際に彼女の目の前では黒い帽子にマスク、そしてコートという怪しさ大爆発の男がいた。周りに人はいないが、別にいても彼女の幻想なのでかまうことは無いだろう。

『いいかい？アリス君、一度でもバカップルを経験したものは、他のバカップルを妬んではいけないよ？』

静かに諭すように変態は言う。

しかしソレもつかの間、変態の横から黒髪美人の女性が現れて状況は一変する。

『山田様、どうかなさいましたか？』

『おお山口君！実はアリス君に人間性の何たるかを説いているところだね』

『まあ、さすが山田様です』

『ハッハッハそうでもないよ』

少女の目の前で展開されるのろけ、持つものと持たざるものとの差が今ここに明確に現れる。

「バカップル爆発しろ！」

ついにアリスの堪忍袋の尾も切れ、幻想相手に石を投げつける始末。しかし効いたのか、幻想の中のバカップルは何処かへと消えていった。

「私だって・・・私だって・・・」

一人呟くアリスの肩を叩くものがあつた。

アリスがそちらを見ると、そこに居たのは宙に浮くミスクラゲ。

「あなたも・・・なんですか？」

悲しそうに触手を振るクラゲを見た瞬間、二人？は意気投合し、クラゲの持っていた酒瓶で乾杯となった。

暗い森の中、2つのグラスが寂しくカチンと鳴る。

くるくる回ってすってんてん(後書き)

お久しぶりです

いきなり3話目から読み始めて初めましての人はいないと思います
が、初めましての人は初めまして

前話から2、3週間くらい空きましたね

それほど空くと閲覧数も良い感じに過疎るのでチェックも疎かになります

まあ自虐ネタはこの辺にすることにしましょうか

さてさて、だれてめえ見たいな名前の人が割と出てきますが・・・

まあ他作品に出た子ということに気にしないでください

たまに出てきますが別に知らなくても問題は無いと思います

次話のネタはもう考えてありますから・・・早ければ1週間には出るでしょう

といいつつ、1ヶ月になる可能性も無きにしても非ずなのでお待ちいただける方はただらただらお待ちください

一応月1更新目標ですから！

ではでは、お読みいただきありがとうございます

少しでも楽しんでいただけたなら幸いです

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？（前書き）

本日のゲストはかの有名な戦う道から、20年間変わらない完成された戦術を持つ軍人さんが来てくれましたー
わーわーぱちぱち

では、早速一言どうぞ

「くにへかえるんだな、おまえにもかぞくがいるだろう」

大変ありがたいお言葉でしたな

人物表

エウナ

吸血鬼 することないのでお昼は基本寝てます

楓

魔法使い よく寝てますよねこの子

アリス・イン・ワンダーランド

魔術師 規則正しい生活は送ってません

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？

徐々に明るくなっていく窓の外ではチコチコと鳥の鳴く声が響く
中、一人寝返りを打つ。寝返りを打つたびに体が柔らかいベットへ
と沈み込む。

眠れない・・・ベットってこんなに大きかったっけ？

こつ、何だか手が寂しく感じられ、何度も寝返りを打ってしまう。
そういえば、楓はもう寝たのかな？

ふと疑問が浮かんだのでベットから立ち上がる。

『そんな・・・夜這いだなんて・・・エウナさんの大胆な・・・』

ドアの目の前で誰かの声と一緒に軽い頭痛がした気がするけど、
気のせいということにして処理する。今朝だし夜じゃないし。

それにこれは楓が寝てるのかどうかを確認するだけで、別に寂し
さに駆られての行動じゃない。うん、そうね。それにもしもあの子
が寂しがってたら大変じゃない。あら、それじゃしょうがないし、
どうしてもというなら添い寝でも・・・。

ぐるぐると思考を回転させながら抜き足差し足で廊下を歩くと、
いつの間にか楓の部屋の前まで辿り着いた。

さて・・・次の一手はとても重要ね。

まあドアを開けたらそこには楓が居たとして、アレ？エウナさん
どうかしたんですか？と言われたとしましょう。

その問いにどう答えるかで、私の運命が決まるといっても過言で
はないわね。

正直に寝てるかどうか気になったと言ったところで、意外と鈍い
あの子はぺかーっと笑ってそのままはいさようならとなるに違いな
い。

それだけは断じて避けたいところ。いえ、別に寝てるかどうかを確認するだけなのだから別にいいのだけれど……。

「アレ？エウナさんまだ起きてたんですか？」

「っ！」

心臓が止まったかと思った。見ればそこには抱き枕を抱えて眠たそうにしているアリスがいた。

「え、ええ、そろそろ寝るところよ」

「そうですかー。私ももう寝ますし、おやすみなさいですね」

「おやすみなさい、良い夢を」

彼女が自室へと戻っていく様を微笑みながら見送る。

「ほどほどにしてくださいね？」

アリスが部屋に入る直前、彼女は全てがわかっているかのような笑顔を残していった。

その言葉で少しばかり引き攣った微笑みを固定しながら1分カウントし、そっとアリスの部屋の中へと耳を済ませる。

中では少しの間こそそそとしていたが、やがてベットへと入ったのかソレも静かになった。

アリスの登場で思い出したけれど、今は明け方。

こうしている間にも、刻一刻と私がここに居ることが不自然な時間へとなっていつてしまう。

ここは覚悟を決めて出たとこ勝負！大丈夫、何とかなるさ、今ままでだってそうだったろう？

突如心の中で出てきた誰かにありがとうと告げると、特殊部隊顔負けの音の立たなさでドアを開いた。

楓の部屋は、よくわからない機具や変な色をした液体の入った力
ツプであふれていた。・・・私たち部屋貰ったの同時期よね？まあ、
ソレはいいでしょう。

どうやらあまりにも音を立てなさ過ぎたので当の本人は気付いて
ない様子。ちようどいい、急に出てきて驚かせて上げましょう。

段々と明るくなっていく部屋で一人微笑む。気分は悪戯を実行す
る直前の子供。経験がないからなんともいえないけど。

四つんばいになりながらそろりそろりとベットへと近づくと、突
然楓の前へと顔を出す。

彼女は、とても安らかな顔をしてすやすやと眠っていた。

そのままの格好で数分間、沈黙が部屋を支配する。認めたくない
現実、安らかな楓の顔、間抜けな私。・・・今の、誰かに見られて
たら死のう。

しかし、眠っていたならしょうがないわね。そう結論付けると次
の行動を考える。

手は楓の頬をぶにぶにと突付くの忙しく、自然と私の頬も緩む。
さてどうしよう。眠っていたのならしょうがない、次はどう動く
べきか。それにしてもやわっこいわね。

しばらくの間つまんだり突付いたりすることに夢中になっている
と、ふと彼女が寝返りを打ったので、可能な限りの速度で静かに壁
際に張り付いて事無きを得た。

・・・何をしてるんだ私は。こんなことをするために来た訳じゃ
ないでしょう！・・・ところで私は何をしに来たんだっけ？

楓は寝ていたわけだから・・・んー、それにしても何食べたらし
んなに柔らかくなるのかしらね？

軽い眠気が残る頭でぼーっと頬の柔らかさについて考えていると、
楓がうなされ始めた。

突如、私の脳内に電流が走る。

楓がうなされているのだから、コレは添い寝をして宥めてあげな
いといけないわね。

別に寝れないからこの機会にあわよくば抱き枕を手に入れよう、とかそういうわけじゃなく私は全てこの子のタメを思っ……。
などと脳内で呟きながらも、静かに素早くベッドの中へと入る。
毛布の中は楓の体温でほどよく暖まっております、それだけで魅惑の魔の手が伸びてくる。当然、そのまま落ちてしまうのはもったいな・
・彼女のためにならないので眠っている彼女を抱きしめて、頭を片手で撫で撫していると、微かに香る血の匂いがさらに私を幻惑する。
大丈夫大丈夫……後はこの子が目覚めるまでに目覚めて自室に戻ればこの事は誰にもわからない。
そのうちに魔の手の侵略が抗いがたい状態まで達し、私は意識は溶けるように無くなった。

何だか覚えのある匂いで目を覚ますと、目の前で楓が照れたように笑っていた。

「……おはようございます」
「……？おはよう」

さてさて？何で彼女がここに？と疑問を抱き、辺りを見渡せばそこは何やらよくわからない機具やカップが乱雑と置かれている部屋の中だった。

その瞬間に蘇ってくる今朝の記憶。襲い掛かってくる私の恥行。思わず頭を抱えなくなるが、私の意志に反して両手はやわっこい温もりを抱きしめていて離れようとしなない。

私の脳内は数パターンの言い訳を思考錯誤するも、コレといったすばらしいものは未だ出てこない。

そうしてる間に楓は甘える様にして私の胸へと顔を押し付けてくる。

一瞬の間に脳内がゴーサインで埋め尽くされそうになるも、理性を総動員して撃滅し、現状を打破する一手を考える。

「エウナさんエウナさん」

「……ん？」

「おはようのちゅー？」

「……」

「んっ……」

「じゃ、じゃあ私は起きるから」

楓と触れ合うだけのキスをしてからそそくさと戦線離脱しようとする、小さい抵抗があることに気付いた。

不思議に思ってそちらを見るとちっちゃい手が私の服を掴んでいた。

「行っちゃうんですか……？」

呟く様な声が聞こえてきて、私の動きは金縛りにあつた様に固まった。

頭の中でこの状況が続く事に対する今後のリスクと、今日の前にある幸せを天秤に掛ける。

「ぎゅー？」

天秤はゴキツと音を立てて今のほうへと折れ、そのまま奈落の底へと落ちていった。

「……しよ、しよぅがないわね」

「じゃははー」

再び元の温もりへと戻ると、楓は嬉しそうに擦り寄って抱きついてくる。・・・ま、まあ、しばらくこのままでも良いかな？うん、しょうがないしょうがない。

自然と頬が緩んでいく中、理性をフル稼働させながら彼女を抱きしめた。

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？（後書き）

Q・次話はバトル回だって聞いたんだけど？

A・バトル・・・ル？

見事に不定期投稿ですね

あ、あらすじ変えてみました

なんというグダグダ

だがタグは変えない

あらすじなんてなかったんや！

ぶつちやけるとバトル回の前の小話を書いてたら1話出来ました

なんというグダグダ

まあいいんですけどね

ということ、少しでも糖分を感じて頂けたら幸いです

旅に行くには準備が大切です（前書き）

（エースコンバット5）

仲間 A 「隊長は落ちないさ」

私 「あー！あああああ！」

チユドーン

「クリトライ

人物表

メリーさん

幽霊 話によっては結婚したりしなかったり

叶^{カナエ}夢^{ユメ}

メイドさん 昔のヒロインなのに影が薄い哀しみを背負いました

ルカ

魔法使い 前作の主人公 前は魔法率皆無でお送りしました

旅に行くには準備が大切です

「エウナさんエウナさん」

「んー？」

私が『和菓子百戦の歴史』という意味不明なシリーズの本から顔を上げると、そこには嬉しそうにお札を突きつけている楓の姿があった。お札には『あくりようたいさん』と下手な字で書いてある。

「・・・何それ」

「魔物退治のお札を作ってみたのです！」

「そう」

えっへんと無い胸を張っている巫女を見なかったことにすると、また読書を再開する。

「ちゃんと見てくださいよ！」

「五月蠅いわね、何よ」

「こーやって魔力を込めるとですねー」

楓が呟いた瞬間、バチッと音が鳴りお札は楓の手から離れた。そして地面へと落ちると黒く炭化する。

その様子を見つめる楓。

「少し、出ますね」

「・・・」

彼女はそう告げると部屋から出て行った。私はその姿に何も言えずにただ見送るだけ。

「むむ？^{オリジナル}本体ったら他人にお茶入れさせて自分は何処かに行っちゃったんですか？」

聞きなれた声のした方を見ると、メイド服を着た楓が紅茶を入れながらニコニコと笑っている。

『エウナさまは、ユメが絶対に守ってあげますね！』

誰かの声と共に、ジャリッと鈍い痛みが頭を襲う。

「……今まで出来たことが出来なくなるってどういう気持ちなんでしょうね？」

ポツリこぼれた疑問はその頭痛のせいなのか……それとも彼女の姿が楓と瓜二つだからなのか……。

「さあ、ボクには出来ることしか出来ないからわからないですね」

「……そう」

「何てったってボクには以前が無いですから！」

紅茶がこぼこぼと湯気を立てている紅茶を私の前へと差し出しながら、彼女はそう笑った。しかし、彼女は少しだけ表情を曇らせると言葉を続ける。

「ですが……エウナさんが悩んでいるなら相談に乗りますよ？」

「……それは」

「安心してください、ボクに話したことは本体は知ることが出来ま

せん。生まれた瞬間は共有していても、数秒もすればボク達は共有できない別人なんですから」

心配そうにして私を覗き込んでくる顔は間違いなく楓なのに、けれども何処か違う。違うことが、わかっってしまう。

「怖いのよ」

「怖い……ですか？」

結局、私はまだ暖かい紅茶を見つめながらポツリと呟いてしまう。……私は、誰かに話したかったのかしらね？本人ではないとしても、そこに居るのは楓と変わらないのに？

「ねえ、突然襲ってくる幻聴と頭痛は何？私は何時からあなたと一緒に暮らし始めたの？あなたは……何時から人じゃなくなったの？」

疑問に答えは出ないままも流れ出た言葉は続かれる。その問いに、彼女が答えられるかどうかなんてわからないのに。

「ある時から記憶がぶつりと無くなって……何か、私は何か大切なことを忘れてるような気がして……それを思い出すと今の生活が無くなるような気がして……」

彼女は黙って言葉を聞き、そして私の頭を優しく抱きしめた。

「残念ながら、本体の意味がわからない以上、ボクがその問いに答えられることは出来ません」

じっと彼女の体温を感じていると、少し気持ちが和らぐ。

「ですが、失った物は戻らなくとも魔法で封じられている記憶を取り戻す方法があります」

彼女は私が落ち着いたのを確認してから離れると、月明かりが差し込んでくる窓を開けると優しく微笑んだ。

「己を知り敵を知れば百戦危うからず、ですよエウナさん」

それは、私の疑問に対する一つの答え。

「どうして・・・そこまで？」

あなたはあの子とは違うのに、どうして？

「例え数分前に生まれ、数秒後には消えるとしても・・・」

私を安心させるためか、彼女は微笑を崩さない。

「ボク達はエウナさんが笑っていられることだけを願ってますし、そのためなら何でもします。・・・だから、そんな辛そうな顔をしてないで」

あなたは、何も悪くないんですから。

最期の言葉が聞こえたとき、彼女は何処にも居なかった。床に落ちているのは、人の形をして燃え尽きた一枚の紙だけ。・・・どうしてあなたはそう勝手なのよ。

「あれ？楓さんが居たと思ったんですけど、気のせいでしたか？」

どのくらいその紙を見つめていたのだろうか、ふと後ろからアリスの声がした。どうも紅茶が冷めていることから結構な時間を過ごしたみたいね。

「エウナさん？泣いてるんですか？」

「・・・気のせいよ。それよりアリス、良ければ良いんだけど・・・」

「んー？はい、何ですか？」

少しだけ彼女の居たほうを見てから、アリスへと向き合う。

「魔法、教えてくれない？」

シトシトと雨が降っている中、山奥にひっそりと建っている屋敷へと数人の人影が入っていく。全員銃を持っており一人は片手に大きなトランクを持っている、黒く素早く、さらに音も無く静かに動く様はまるでゴキ・・・特殊な訓練を積んでいる様に見える。

ところどころ朽ちて穴の開いている玄関ホールで一人が合図を出す、ゴキブ・・・彼らは1階と2階で分かれた。ちなみに徒歩であり飛んではない。

明らかに屋敷よりも長い2階廊下をカサカサと静かに動く不法侵入者3人。時折立ち止まっては手に持った計器を見ているところから、目的地の場所はわかっている様だ。

そして、永遠に続くのかと思われた長い廊下もついに終わりを向かえ、彼らは一つの扉の前で立ち止まった。中で物音がしないことを確認すると、廊下に1人を残して中へと入っていく。開けたら閉

める常識は今のところ通用されない様子。

ほろい他の部屋とは違い、高級そうな調度品がある部屋の中、ベツトには一人の女性が横たわっていた。白いドレスに身を包んだ女性は長い金色の髪をベツト全体に広げ、静かに目を閉じている姿は人形にも見える。

その女性を近づいて確認すると、へんた・・・一人の男が手に持っているトランクを開けた。中に入っているのは、ホワイトアッシュの杭とハンマー。

二人がそれぞれ杭とハンマーを手にした時、突然部屋の扉が閉まり部屋の外から銃声が聞こえてきた。彼らは反射的に近くにあった銃を構えて扉へと向けた。そのまま数十秒、不気味な沈黙が屋敷の中を支配する。しかしお互いに目配せをした瞬間、その沈黙は破られた。

突如ドアと一緒に何かか吹き飛んできて一人の男を押し倒した。押し倒された男が驚いて、あさつての方向へとトリガーが引かれる中、開きっぱなしとなったドアから小さな少女が飛び出し、まだ立っていた男の首へと手を掛けた。そのまま勢いをつけて首をへし折る。

頭が変な方向へと曲がった男が倒れる中、少女は未だ仲間の死体の下から抜け出せずにいる男をちらりと見ると、死体ごとその体を踏み潰した。勢いよく出た血飛沫が少女の服に赤い斑点を作った。

少女は自身が赤く染まるのも気にせず、メイド服から携帯電話を取り出すと何処かへと電話を掛ける。

「メリーさまー？」

電話を片手に持っているメイド服を着た少女は小さい子供ほどの大きさで、腰まである長い白髪を後ろで纏めている。少女がうんうんと頷くたびに、後ろの髪がさらさらと揺れた。

やがて、ドアから一人の女性が現れると少女は電話を懐へと閉ま

い、とてとてと女性の下へと駆け寄った。部屋へと入ってきた女性は銀髪のポニーテールを揺らしながら駆け寄ってきた女性を抱きしめる。

「わお・・・これまた派手にしましたね、ユメさん」

「・・・ダメでしたか？」

「いえいえ！そんなことは無いですよー」

女性・・・メリーは駆け寄るや否や不安そうに見上げてくるユメを撫でると笑顔で応える。気持ちよさそうに目を細めるユメ。

「とはいえ、ちょっと汚れすぎですよ！」

「ごめんなさい・・・」

メーと指を出すとユメはしょんぼりと肩を落とした。ちょっとで済むのか・・・ソレは誰にもわからない。

「まあ、私も準備がありますからその間に着替えてきてくださいね」「うん！」

ユメは元気よく返事をする、とてとてと部屋から出ていった。その後姿を微笑みながら見ていたメリーは、ベッドで横たわっている女性へと目を向けると少し表情を暗くした。

「そつえばルカはー？」

「んー・・・電話にも出ないですしどうしてるんでしょうね？」

「そつかー・・・」

新しいメイド服へと着替えてきたユメが何気なさを装って聞くと、メリーは困ったような顔をして答えた。

「まあ、あの人なら平気でしょー。ではでは行きましょーか」

メリーは何処と無くがっかりした様子のユメに苦笑しながら隣の部屋の扉を開くと、どういうわけか食堂が見えた。

しかし二人とも特に気にした様子は無く、先にメリーが、その後で眠っている女性を抱えたユメが続くようにして入っていく。

「うらぐちー？」

「はい、裏口ー」

二人がのんびりと食堂から台所へと歩いていると、突然入ってきた扉が開き、数人の兵士が銃を撃ちながら現れた。ところで全員同じ格好なのだが、見分けは付くのだろうか。

「・・・意外と準備万端ですね」

「どうするのです？」

「んー、先に行つててくれますか？」

「大丈夫なのですか？」

「だいじょーぶなのです」

その間も銃声は絶え間なく続いているのに、その弾は触手の様なもので防がれて彼女達に届くことは無い。

心配そうに何度も振り返るユメがとこと台所へと入って扉を閉めると、扉越しに兵士達の悲鳴が聞こえてくる。しかし、数分も経つと悲鳴も聞こえなくなり、メリーが静かに扉を開けて入ってきた。

「お待たせしましたー、ではでは行きましょーか？」

「うん！」

メリーが勝手口の扉を開けて屋敷の外へと出ると、外は白い霧で数歩先も見えない状況になっていた。

二人はその霧の中をはぐれないように手を繋ぎながら歩いていくと、古ぼけた車庫へとたどり着く。

メリーは慎重に中の気配を探ると、静かに扉を開けた。車庫の中も霧が広がっていたが、二人が中へと入るとぱちんと指の鳴る音がしてゆっくりと霧が開けていった。

中には黒いのワゴン車が一台あり、床は水浸しとなっている。

「アレ？意外と早かったじゃない？」

「お待たせしました。もう出れます？」

「それはメリーさんに任せるよ」

洗浄用のホースから水を出して床を濡らしながら、中に居た赤いコートを着ている少女が笑って言った。

「はいなー、ではでは出来る限り早く出ましようか・・・あ、そういえば霧はどのくらいまであります？」

「んー・・・街の外辺りまでかな？」

「そうですか・・・」

メリーは少しだけ表情を暗くしたが、すぐに笑顔になると車庫のシャッターを開ける。

「ルカ！こつち掛けないでよ！」

「わかってるわよ・・・後きちゃんと『さん』をつけなさいちびっ子、グリグリするぞ」

「やー！」

「よろしい、ならばグリグリだ」

ルカは逃げようとするユメを捕まえると、頭をグリグリする。

「眠り姫は一番後ろ？」

「そうですね・・・トランクに詰めるのはアレですしそこがいいかと」

「だ、そうだちびっ子」

「いひゃいひゃい！わかったから離すの！」

ユメは開放されると、一発蹴りを入れてルカを悶絶させてから眠り姫と呼んだ女性を車に乗せる。その作業の中、車の後部座席からリアカーにいつもは被せられていなかった青いビニールシートが被せられているが見えた。

不思議に思っただけで近づくと、何かを積んでいるのかビニールシートが少し膨らんでいる。ユメの中にむくむくと湧き上がる好奇心。

しかしその好奇心もシートに手を掛けたところで待ったが掛かった。

「よし、そこまで！そこから先はちびっ子は見ちゃダメ」

哀れにもユメは後ろから抱きかかえられると車へと連行される。

「子ども扱いたくないのー！」

「はいはい、夜寝れなくなるから見ちゃダメよ」

「ルカ臭い！血生臭い！」

「・・・そ、それは聞き捨てなら無いわね」

ルカはじたばたと暴れるユメと自身を抑えながらも車へと連行する。

「準備は出来ましたかー？」

「こっちは平気ー」

「ぶー・・・」

運転席に座ってるメリーは膨れてるユメを見て微笑むと車を発進させた。

「ではでは行きましようか・・・魔法使いを探しに」

旅に行くには準備が大切です（後書き）

ありそうな質問

Q・何この話、別じゃないの？

A・同時進行です

Q・何で作品にするの？馬鹿なの？死ぬの？

A・世界観は微妙に一緒ですので勘弁してください

説明になってない？聞こえんなー

本作品には他作品を読んでもわかりそうでわからないようなネタがたまに出ます

別に問題は無いと思いますがご了承ください

また本作品には平然と骨が折れたり色々したりします
ご了承ください

甘くない？あらずし詐欺？バカップルじゃない？ゴメンナサイ

次話は普通のいつものイチャイチャが入ると思います

というより、他の人の読んでも色々自重したほうがいいんじゃない？とか思うんですがどうなんでしょうね？

ひたすらバカップルしてる姿なんて見せられて楽しいものなんでしょうか・・・

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

我が家では1年12ケ月中11ケ月はお鍋の季節です(前書き)

誰が得する用語説明のコーナー

どどんぱふぱふーヅ()ノシ

さあ、第2回があるかどうか分からない誰が得する用語説明のコーナーがやってきました

第1回は『魔法使い』と『魔術師』の違いです
ちなみに本編には全く関係ないですから！

魔術師が魔法を専門にしている人のことで魔法使いは魔法が使える人のことです

数学で書くときこんな感じ

魔術師 魔法使い

これでよくわからない人のために例を挙げると

魔術師〃大学教授

魔法使い〃生徒

だと思ってください

つまり魔法の専門家が魔術師なんですよ！

わかんなくても本編にはほぼ関係しないので気にしないでください

人物表

エウナ

きゅーけつき 昔にやったちゅーけつきというネタがネタじゃ無くなって来ました

楓

魔法使い 嬉しいと耳がひよこひよこ動きます ちなみに正式に告白は一度もしてないです

アリス・イン・ワンダーランド

魔術師 お酒に弱い とにかく弱い 寝起きも弱い とにかく弱い

ミツキ

クラゲ (´・ω・´) いいですよね、クラゲ

我が家では1年12ケ月中11ケ月はお鍋の季節です

私は今、人生最大の窮地に立たされている。

目の前にあるのは開かれている1冊の本、認めたくない現実。スタート時は笑顔だった私の顔は既に仮面を通り越して石像と化している。

「つまり誰がしても大体同じ様な結果になる科学と考えが違って、魔法は出来る人だけが出来ればいいという考えで動いています。

もちろん、魔術師の中にも誰にでも使えるということを目指している人も居ますが・・・どちらにしても魔術師達の目的は一つ。アカシックレコードを指すことです」

「へ、へえ・・・そうなの」

・・・アカシックレコードって何なのかしら。

「それですね・・・」

アリスはそう言うのと本のページを一枚めくり、ある場所を指し示した。どうしようもないので視線を落とせば、私へと襲い掛かってくる意味不明の言葉の羅列。

それだから始まる言葉はほとんど理解が出来ない。中には辛うじてわかるものも少しあるけれど・・・それじゃわからないのと大して変わらないじゃない。

アリスから発せられる言葉は空中で分解され、私の耳に届き、脳へと留まることをせずに逆耳から飛び出して行く。

ここまで来ると、私の目の前に居る彼女は本当にいつも接していた彼女なのか疑問を覚えてしまう。

「ア、アリス……ちよつといい？」

「はい？どうかしましたか？」

にこにこ嬉しそうに何かの言葉を発していたアリスは私の顔を見つめてくる。

覚悟を……決めるときが来たようね。

「コレって……皆覚えてるものなの？」

「んーと……完全では無いですが、皆大体は覚えてるんじゃないでしょうか？」

「そ、そう……」

私は精一杯の精神力を使って感情が表情ほんねに出ないたてまえように気をつける。

「大丈夫ですか？」

……どうやら少しだけ出てしまったらしく、心配そうにアリスが覗き込んでくる。

どうしても認めたくないけれど、認めなければ先に進めない。それはわかっているのだけれど、それを認めるにはどうしてもプライドが躊躇してしまう。

「……少し休憩にします？」

「ええ……そうしましょう。紅茶入れてくるわね」

そう告げるとそそくさと台所へと逃げて天を仰ぎながら逃げ続けた事実を目を向ける。

私って……馬鹿だったのね……。

何時までも嘆いていてもしょうがないので、悲しみを背負ったま

ま適当に紅茶を入れて持つてくると、テーブルの上には現実が待っている。

『だれでもわかる！まほうがくのほん（こどもよう！）』
やたらと強調されたその本は挿絵も多く、さらに振り仮名も振っ
ていて確かに子供用なんでしょうね……。私はわからなかったけ
れど。

「どうかしましたか？エウナさん」
「いえ、何でもないわ」

忌々しいその本を何時までも見ていると、彼女に悟られてしまっ
のでさりと視線を逸らしてカップに紅茶を注ぐ。

ほこぼこと湯気が立ち上ってくるソレは、既に香りだけでいつも
飲んでいるものよりも劣っていることを主張してくる。

「……美味しくないですね」
「……ええ、ホントにね」

適当に入れた紅茶は見事な風味を醸し出し、私達の味覚に渋みだ
けを訴えてくる。つまり不味い。すごく不味い。ストレートで飲む
気にならないくらいに不味い。

今度楓に紅茶の入れ方でも教えて貰おうかしら？

「ところでエウナさん？さっきの話、全くわかってないですよね？」

アリスがカップにミルクやら砂糖やらをぶち込んでいる様子を羨
ましそうに見ていると、スプーンでくるくるとかき混ぜながらアリ
スが言った。

心臓が止まるかと思った。

「そ、そんなことは無いわよ？」
「そうですかー」

世界が止まったかの様な空気の中、アリスのスプーンだけはくるくると動き続ける。

私はその空気に耐え切れず、やけに乾く喉を不味い紅茶で喉を潤そうとして突然注ぎ込まれた熱に失敗していた。

「いいですか、エウナさん」

そんな私の様子を微笑んで見ていたアリスが諭すように言う。

「わからないならちゃんとわからない、と言ってくれないと困ります。まあ、言わなくてもわかりますが……」

「……」
「ちゃんと言ってくれば此方もきちんと対処しますから……ね？」

「……まずその手間の掛かる子を見るような顔を止めなさい、話はそこからよ。」

当然そんなことを言えるわけも無く、ただ黙って事態の沈静化を待つ。大体今回で本を変えるの3回目なのよ！？言えるわけ無いじゃない！

「ん、んー……あれ？ミツキさん、山狩りは終わったんですか？」

困ったように紅茶を飲むアリスをなるべく見ないようにしていると、頭に救世主なにかが乗っかってきた。

「……乗るのは良いけれどお面ずらさないでよ？」

私の上で応じるように揺れ動くミツキ。その動きは私に対する返答なのか、アリスに対する返答なのか、一体どっちなのかしらね？

「そうなんですかー、ではでは楓さんももう帰ってきますね」

何故かはわからないけれど、アリスはミツキの言うことがわかるらしい。

そして、魔法の勉強のことは楓には秘密にしておいて欲しい、という私の身勝手な願いを律儀にも守ろうとアリスはせっせと本を集め始めた。当然私も参加する。

「ただいま戻りましたー」

「お帰りなさい」

アリスが使った本を片付けに行っている間に、秋なのだからとか言うよくわからない理由で山狩りへと向かった楓が帰ってくる。

「見てみてエウナさん、たいりょー！」

嬉しそうに耳をぴくぴくと動かしながら、腰につけた籠を私の後ろから抱き付いてきて見せてくる楓。中には色鮮やかな良くわからないキノコやら山菜らしきものやらがつまっている。正直よくわからないけれど・・・このキノコ大丈夫なのかしら・・・？。

「そう、それはよくやったわね」

「んー」

よくはわからないけれど、褒めて欲しそうに耳が動いていたので頭を撫でると、気持ちよさそうに目を閉じた。

「・・・ねえ楓？何か捕まえた？」

さつきから籠の中に袋がびくびくと揺れて自己主張を繰り返して
るのだけれど。

「んーとですね、ツチノコー！」

「そうなの、ツチノコなの」

「うむうむー！」

さつきと同じ様に撫でて撫でてーと楓の耳がびくびくと動くが今
度は無視する。・・・記憶違いが無ければツチノコってアレよね？
あのへびみたいな。

「・・・逃がしてらっしやい」

「美味しいですよ？」

「ダメよ」

「ぶー・・・」

そんなゲテモノ絶対に食べたくないの楓の言葉を一言で切り捨
てると、彼女は不満そうにぶーぶー唸り始めた。

そうしてしばらくの間むーむーと唸っていたが、やがてツチノコ
が入っている袋を持つと目を輝かせた。

「じゃあちゅーしてくれたら逃がしてあげます！」

「よし渡しなさい、私が捨ててくるから」

「やー！」

その言葉が聞こえた瞬間に拳を振るうと、頭の上に居たミツキが
驚いたように揺れた。願うは唯一つ、食べたくない。

しかし、不完全な体勢から放たれた拳は目標にたどり着くことなく空を切る。

「あら、逃げなければ一瞬で終わったのに・・・残念ね」

「エウナさんの拳に愛が籠っているなら正面から受け止めましょう！」

「哀なら十分に籠っているから安心しなさい」

「文字にしないとわからない違いを言わないでください！」

「何言ってるかわかんないわね！」

拳に加えて蹴りを混ぜるも、彼女に当たる気配は無い。まあ、当てる気もないのだから当然なのだけれど。もちろん、家具を壊さないように細心の注意を払うことは忘れない。

「わわっ！何してるんですか！」

途中でアリスが帰ってくるも気にせず、当たらない攻撃を加えながら楓を何も無い角へと追い詰めていく。

「さあ、追い詰めたわよ？」

「エウナさん！ケンカは良くないです！」

「アリス・・・コレはしないといけないことなのよ」

あなたもツチノコなんてゲテモノ食べたくないでしょう？
必死に止めようとするアリスへと対応しながらも、視線は楓から外さない。

「ふふ・・・追い詰めた？冗談でしょう？」

追い詰められているにも関わらず楓は不敵な笑みを浮かべてそう

言つと、そのまま両手を精一杯此方へと向けてくる。

「さあ！観念してボクにちゅーするのです！」

「・・・エウナさん、手伝います」

「・・・見えてる所には傷を残さないようにね」

「わかりました」

「ちょ、ちょっとまってください！二人掛りは無理ですって！」

夜も深まる家の中、楓の言葉が空しく響いた。

「ところでコレどつするの？」

悪も滅して一段落付いたところで、山狩りの成果をどうするかアリスへと聞くと、彼女はんーと宙を見上げた。私も釣られて上を見るけれども・・・天井しかないわね。

しばらくの間天井と勝負の付かないにらめっこしていると、ミツキが私の頭をぺしぺしと叩いて自己主張してくる。とりあえず頭に手をやって撫でるとふよふよとした感触が返ってきた。

「・・・ぬめぬめしてる」

「んー？」

「何でもないわ」

気のせい・・・であって欲しいけれど、ぺしぺしが強くなった気がする。

「お鍋にしましょうか!」
「鍋って・・・誰が作るの?」

自慢じゃないけれど私も楓も料理は全く出来ない。アリスも何かを温めたりするところは見たことあるけれど・・・出来てる物を温めるのを料理と呼ぶには少し辛いものがあるわね。

「安心してください!私が作るわけじゃないですから!」
「それじゃ誰が作るのよ」
「私に心当たりがありますから!その人のところに行きましょう」

こうして自信満々に胸を張ったアリスに率いられて夜の街へと繰り出すことに。悲しいことに、張っている胸は見事なまでの平らっぷりなのだけれど。

今がどのくらいの時間なのかはわからないけれど、夜中の街はとても静かで、私の背中からしている楓の寝息が微かに聞こえてくる。上を見上げれば半分に割れた月が光輝いているし、少し遠くを見れば建設途中となっている塔が見える。

私の視界の中で、ゆっくりと塔から誰かが落ちていくのが見える。その幻想を見た瞬間、ズキツとした痛みを襲われて頭を抑えてしまふ。

「どうかしましたか?」

片手に籠を持っているアリスが不思議そうに覗き込んでくるけれども、返事をする余裕が出ない。

私の目の前で銀色の髪が月明かりに反射する。その綺麗な髪も、赤い汚れが付いて・・・。

微かな血の匂いが強くなった。

『・・・我が名の下に命ずる』

しかし、突然誰かの声がしたかと思うと、急に頭痛は治まった。

「お家に戻ります？」

「大丈夫よ・・・さあ、行きましょう」

「・・・そうですか」

アリスに余計な心配を掛けないために笑いかけると、また夜の街を歩き始める。けれども私の足はすぐに止まる事になった。

悲しいけれど、先頭を歩くには道がわからないのよね・・・。

その後、とことことまるで鴨の子供の如くアリスの後ろを引つ付いて歩いていると、街外れの店へとたどり着いた。

アリス曰く、看板も出てないその店は知る人ぞ知る高級料亭だとか何とか。見た感じでは小さい明かりが漏れているけれど、正直やっつてるのかやっつてないのかすらわからないわね。

「・・・コレ、やっつてるの？」

「だいじょーぶです、少し人嫌いの人がやっつてるからこうなってるだけですから」

そう言うと、がらがらと扉を開けて入っていくアリス。

その店へと入る前に、ちょうどいい茂みへとツチノコ入りの袋を放り投げしておくことも忘れない。口は開けておいたし、よほど運が悪くなければ死ぬことも無いでしょう。

「いらつしゃい・・・あら、アリスじゃない。元気してた？」
「お久しぶりです。元気してました」

私の中へと入ると女将さんらしき人と知り合いらしく、和やかに会話をしている。一人蚊帳の外で切なく待つ私。

「最近来ないから気になってたのよ。そういえばルカは元気？」

「ルカさんは・・・そうですね、たぶん元気です」

「そ、それじゃ金が無くなったらいつでも戻って来いって言うておいて」

「はい、伝えておきますね」

今一瞬、少しだけ暗い表情が出たような気がするのだけれど・・・
気のせいかしらね？後ルカって前に聞いたことあるような？

はてさて何時だっけ？と悩んでいる間にも話はぼんぼん進んでいて座敷へと案内された。

落ちついた感じの部屋の中には木で出来た大きな机があつて、私達はそれぞれ思い思いの場所へと座る。ずっと私の背中であつている楓はコートを剥いでから適当なところで落とす。

「ここはよく来るの？」

「はい、結構馴染みなんですよー」

女将さんの注いだお茶を飲みながら何が美味しいとかドレが美味しくないとかの話に花を咲かせていると、やがて料理がやってきた。お刺身やお酒やらよくわからないものやらが私の目の前に次々と運び込まれて行く。運ばれていくたびに説明が入るのだけれど、ふんふん、はあ、へー、と聞いていることしか出来ない。とりあえず何かの食材の名前を言ってることだけは辛うじてわかった。

味は美味しいのも、そうでないのもあるけれど一応残さず食べる。それにしても、この小皿の料理だけでいくらになるのかしらね・・・。

お酒も入りゆらゆらと食事が進む中、メインとなるお鍋がやってきた。

見た目は普通で野菜がぐつぐつと煮えている。でも中に肉類が入っているような気がするのだけれど・・・まさかツチノコとか入れてないわよね？

「このお肉は？」

「はい、ソレはですね」

営業スマイルで返された肉の名前は知らなかったけれど、逆に知らないからこそ安心できる。味も普通に美味しかった。

楓のことだからこっそりと毒キノコとか混ぜているのかと思ったのだけれど・・・そんなことも無い様子？

そんな私の心境を知ってか否か、申し訳無さそうに言い始める女将さん。

「キノコなのですが、全て毒キノコだったので勝手ながら処分させていただきますました」

「いえ、気にしないで」

私は何とか微笑を維持して女将さんへと返す。

混ぜてやがった！しかも全部！・・・通りでキノコが無いわけね。というより全部って事は私達にソレを食べさせようとしてたって事よね？・・・さてさて・・・どうしてくれようか。

「かえでさんずっとねてますねー」

「そうね・・・そろそろ起してもらえる？」

「はいー」

私がほのかに赤い顔のアリスに頼むと、彼女はのそのそと動いて楓を揺さぶった。

「……おはよのちゅーが無いと起きません！」

「ちゅー？」

「……」

頭が回ってないじゃない……。思わず頭を抱えるとアリスを楓から遠ざけ、料理についてきたカラシを集める。どける際にアリスがふわわーとか言っていたのだけれど……。大丈夫なのしからね？色々と……。

目標確認、発射まで3秒。

静かに心の中で3秒カウントすると、何かのたまっている馬鹿へと爆弾を投下する。燃えるようなキスをあなたにプレゼント。

「んー……。？んんんっー!？」

爆弾は見事に目標へと着弾し、目を白黒とさせた楓が飛び起きてきた。

「大丈夫？はい、お茶」

「ありはとつごはいます」

悶えるように耐えている彼女へとあつーいお茶を渡してあげる優しい私。

「つつっー!」

結果、楓は涙目になりながら部屋の外へと消えていった。たぶん、癒しの水を求めて。

その様子を冷めた目で見送っていると、視界の端でアリスがこっちに向けて口を開いているのが見えた。・・・何？

「あーん」

「・・・」

・・・何を求められているのかはわかるけれど、何で求められているのかがまるでわからない。さてさて・・・どう対処しようか。

「んー？」

私が対処法に悩んでいると、不思議そうな顔をしてからまた口を開けるアリス。

「あーん」

「・・・あーん」

「えへー」

何となく口元へと料理を運ぶと、ぱくりと食べてぺかーと笑う。そしてまた次をよこせとばかりに口を開ける。

することもないし、しばらくの間アリスへと食べ物物の輸送作業を続ける。気分は雛鳥に餌を与える親鳥。

「・・・もついいの？」

「やー」

やがて、あーんも無くなったので聞いてみると、アリスはぺかーと笑うと何故か私の頭をぺちんと叩いた。・・・誰か助けて。

衝撃でずれたお面を直している間にもアリスの奇行は続く。
彼女はのそのそと私の前まで動くと、ごろんと膝の上に頭を乗っけてきた。

「ねむー・・・」

一言呟くと目を閉じるアリス。私は助けを求めべくクラゲの方を見ると、そいつは目が合うや否やふよふよと飛んで私の頭の上に収まって動かなくなった。

「ちょ、ちよつと！アリス！離れなさい！」

「んー？」

「んー、じゃないから！いいから離れなさい！」

「うー・・・！」

何とか引き剥がそうとするも、アリスは私の腰をホールドして離れようとしない。

「あつたかー・・・」

これは拙い！かなり拙い！とにかく剥がさないと・・・もしも楓に見られたりなんかしたら。

「あ・・・」

そこで私は気付いた。気付いてしまった。

ぎぎぎ、と音が鳴りそうなきこちなさで襖の方を見る。

そこにはものすごい綺麗な笑顔を顔に貼り付けた楓が立っていた。それはもう・・・あまりにも綺麗過ぎて人形に見えるくらい。

楓は笑顔はそのままゆっくりと席へと着くと、黙々と食べ始め

た。

「あ、あの……コレは……アリスが……ね？」

たじたじになりながらも何とか現状を説明しようがんばる私。

「いえいえ、いいんですよ？ボクのことはお気になさらず続けてください」

す、素敵な笑顔ですね、楓さん。それはもう……素敵過ぎて怖いほどに。

息が詰まるような沈黙が舞い降りた部屋の中に、アリスの寝息と鍋がぐつぐつと煮える音だけが響く。

この状況は……かなり拙い……！

如何にして現状をごまかし……もとい、打開策を考えるも移動が制限されている今、出来ることはほぼ皆無といって良い。

「あらエウナさん、お皿が空じゃないですかー。その状況じゃよそえないでしょうし、ボクがよそってあげますよ」

ニコニコと笑顔のままですう言う私の皿を持っていく楓。そして返されてきた中身は……スープだけ。

こ、これはどういふことなんでしょか？楓さん？

針のむしろのような状況の中、救世主とも呼べる女将さんがデザートトのプリンを持ってきた。プリンはクリームについてる高級そうなもの。

「仲が宜しいんですね」

……救世主かと思えた女将さんは私達の現状を見ると、一言爆

弾を落として去っていった。

パキッと何かが折れた音が楓のほうから聞こえてくるけれど、怖くてそちらのほうはとも見れない。

引き攣った笑顔を襖の外へと向けていると、食事も終わったのかちやかちやとスプーンが鳴る音が聞こえてきた。

そちらのほうをちらりと横目で見ると、無表情の楓が顔にクリームが付くのも気にせず機械的にプリンを口に運んでいる。その瞳は虚ろで光は無く、正直に言うとかなり怖い。すごく怖い。

しかしその観察が功をなして打開策が閃いた。出来る限りの速度で脳内シミュレートをする。かなり難しいけれど・・・出来るとか出来ないとかじゃない！やるしかない！

「か、楓？」

「・・・はい、何でしょうか？」

私が話しかけるとすぐに笑顔へと戻る楓。ただし、瞳は虚ろで光は無い。

その顔を見た瞬間に心がくじけそうになったのだけれど、何とか勇気を振り絞って考えに考え抜いた作戦を実行に移すべく笑顔を作る。

「そ、その・・・ほっぺにクリームがついてるわよ？」

「・・・それはご丁寧にあります」

「よ、よければ私が取ってあげるからこっちにいらっしやい」

「・・・はい？」

ゆっくりと首を傾げる楓。・・・耐えろ、耐えるんだ私！泣くんじゃない！泣いたら全てが終わるわよ！

全力で自身を鼓舞して笑顔を維持。

そのまま永遠とも思える時間が過ぎ、やがてゆっくりと楓が此方

へときて私の横に座る。

「・・・では、せつかくですからお願いしましょうか」

「え、ええ・・・任せて頂戴」

「ここが正念場ね・・・。」

覚悟を決めると、素早くクリームをついた楓の頬へとキスをする。そしてそのまま優しく舐め取ると、口内に上品な甘い味が広がる。

「・・・」

「と、取れたわよ・・・?」

口を離して楓の顔色を伺おうとすると、突然視界が黒く塞がれたかと思うと、唇に柔らかいものが触れてすぐに離れた。

「か、楓・・・?」

何も見えない中、思わず名前を呼ぶも返事は無い。そして、私は何かに残るから抱きつかれた。

「見ないでください」

とっさにそちらのほうを向こうとすると、楓の静止が掛かったので慌てて向くのを止める。視界の端で彼女の狐耳がぴくぴくと耳が動くのがちらりと見える。

「エウナさんはずるいですね・・・」

何も出来ないので黙って抱きしめられていると、後ろから楓の声がした。

「……ずるいです」

呟くような声がすると、強く抱きしめられて静かになる。

こ、コレは許されたと判断していいのかしらね……すごい気になるのだけれど……失言は絶対に避けたい。

となければ大事なのは最初の言葉。

さてさて……なんて返したらいいのかしらね？

悩みながら窓のほうを見ると、整えられた庭が月明かりに照らされてるのが見える。

「……月が綺麗ね」

ぼつりと漏れたのは、変わらないいつものやり取り。

「……ホントですね」

返答が来た後、抱きつく力が少し優しくなったような気がした。

「ん……そんな……ダメですよ……」

「……」

下のほうでアリスの声がしたかと思うと、楓の手がゆっくりと私の首に掛かる。

「ま、待って楓！は、話を……」

「いいですよー？何でも言ってください」

そ、そこ首だから！そこ絞めたら声が出ないから！色々と出なくなっちゃっから！

「あれ？何も言わないんですか？遠慮しなくてもいいのに・・・」

ぎざぎざ、っと楓の力が入っていく。ちょ・・・それ以上は・・・
まず・・・っ！

やがて骨の折れる音が聞こえてくるのと同時に視界が回り、私の意識は無くなった。

我が家では1年12ケ月中11ケ月はお鍋の季節です(後書き)

昨日は湯豆腐今日はおでん

めぐりめぐるお鍋の季節ゞ()ノシ

あ、前話から1週間で出来てますが・・・次もそうなるとは限りません

では、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

旅に危険は付きものです(前書き)

おや？(< > < >)の様子が・・・

((< > < >))

(< > (< > < >) < >)

((< > < >))

(< > (< > < >) < >)

((< > < >))

(< > < > < >)の進化は止まった

いつもよりめっさ長いです

人物表

メリーさん

幽霊 特に意味も無いですが幽霊です 立場的な力関係ではたぶん一番強い

カナエ ユメ
叶 夢

ちびっこメイドさん メイドさんらしいことしてたのももう昔の話・

ルカ

魔法使い 恋人は女の子 別に男性に興味がないとかじゃないよ！

浮気性でもないよ！

本作品は全話読み終えた後に、嫌な味が残るといいなーという目標の元に作られています

旅に危険は付きものです

周りが明る過ぎるせいかさほど綺麗に見えない星空の下、買い物袋をぶら下げて歩く。もう日が落ちると肌寒くて、秋の終わりを告げられている気がする。コートを着てなかったら少し辛いかも。

それでも月は綺麗ね……。

満月から少しだけ欠けている月は何処か愛嬌を感じる。完璧じゃない辺りとか。

そういえば、月が出ていると星空がよく見えなくて聞いたことがあるのだけれど、本当かしらね？

「止まれ」

空を見上げながら町外れの宿へ向かってふらふらと歩いていると、聞きなれた声がしたので立ち止まる。

見ればそこには手に棒を持っている黒い制服を着た殿方二人。全く、今日も検問ご苦労様と言いたい。言わないけど。

「ここから先に何の用だ？」

「この先の宿に泊まっているものです」

「どうしてこの先の宿なんだ？」

「旅をしていまして、なるべく安いところを選んでます……通ってもよろしいでしょうか？」

「……荷物を確認してからだ」

もはや定番となった受け答えをすると、簡易式のテントへと連れてかれる。ここに連れてかれるのは今日で何回目だったかな？

「済みません、何度も確認して……」

一人が買い物袋をがさがたと開ける中、もう一人の男性が申し訳無さそうにお茶を出しながら言った。それにしても買い物袋しか確認しない辺り、かなり雑よね。

「お気になさらないください。ですが・・・近頃は寒くなってきましたし、体調は崩さない様にしてくださいね？」

「い、いえ！自分は健康だけが取り得なので！」

本心はともかくとして、私がそういつて笑いかけると、彼は少し赤い顔をしながら胸を張った。そのまま二人で笑いあう。

「今日は買出しですか？」

「はい、少しずつでも準備はしないとイケませんので・・・あ、申し訳ございませんが、ビニール紐は解かないでいただけますか？」

「・・・だそうだ。ビニール紐なんて旅に使うんですね？」

「あると便利です。」

もしもの時の止血とか・・・とは口には出さずに黙って微笑んでおく。触らぬ神に祟りなしね。近頃の神さんは触らなくてもあるらしいけど。

視線の端では買い物袋から出された小瓶やビニール、水なんかテーブルの上に置かれている。あの様子ならもうすぐ確認は終わるでしょう。

「異常なしです。ご協力ありがとうございます」

「いえいえ、お勤めがんばってくださいね」

きつちりと戻された買い物袋を再びぶら下げると、彼にだけ見える様に小さく手を振ってからまた歩き出す。

「あ……少し待ってください！」
「……はい？」

数歩歩いたところで呼び止められたので振り返る。この時間帯、あまり長居はしたくないのだけれど……。

「その……和食と洋食ではどちらが好みでしょうか？」
「和食と洋食……ですか？」

鸚鵡返しに答えて時間を稼いでから、私の嗜好に何の意図があるのかと少しだけ考える。……素敵な差し入れでもしてくれるのかな？

「和食……ですね」
「そ、そうですね！その……美味しい和食の店があるんですが……もしよろしければ今度どうです……か？」

差し入れじゃなくて食事の誘いだった。少しだけ気が抜けるけれども、微笑は作ったままで答える。というより最後に自信なさげになっちゃんいかんでしょう。

「それは素敵ですね。では何時にしましょう？」

その後、何処何処に待ち合わせという簡単なやり取りをしてから、再び宿に戻るべくテクテクと歩き始める。

さてさて……、

この事実をあの二人に言ったら何ていわれるかわかったものじゃないけれど……言わない訳にはいかないのが切ない……。

それにしてもここに來てから1週間か……そろそろ急ぎたいな

のだけれど・・・まあ、なるようになるわね。

「どうやら魔術と科学で対立してるそうよ」

「それはまた在り来りな・・・どっちが優勢です？」

「言わずもがな、ね」

「・・・科学ですか」

「それにしても、大々的な魔女狩りって・・・何時の時代よ」

「ソレはソレはー、うかつに外を歩けないですねー」

「それでも行くの？」

「居るんでしよう？」

静かな車内にちびっ子の寝息が聞こえてくる中、ギルドの情報屋から掻つ攫った資料をがさがさと漁って目的の項目を探す。

「入ったのは・・・昨日？それから先は中で探すしか無いわね。てか堂々と正面突破したみたいよ」

「・・・」

「・・・本当ですか？」

「・・・ホントに」

正規では無いとは言え、軍隊相手に、正面突破。

「まあ・・・楓さんに色々教えた人らしいですからね」

「・・・ホントに？」

「・・・本当です」

アレの先生か……。もしかして私たちはむちゃくちゃな奴を追ってるんじゃないかと、今更ながら心配になって来た。

「何にしても！少なくとも居る場所はわかったんです！後は出たとこ勝負ですね！」

「ま、まあ、他に手は無いからね」

乾いた笑いが響く中も車は進んでいく。

和服を着るとどうも落ち着かない。コートまで剥がれたのだから余計に。気のせいか、軽く頭痛もする。

「ど、どうかした？」

「……いえ、少し夜風が冷たく感じまして」

「そっか……。それじゃ少し急ごうか」

心配そうに聞いて来た彼へと無難な微笑と答えを返すと、彼は少しだけ歩く速度を上げた。私を気遣っているらしく、ほんの少しだけの微妙な変化。

それにしても、公私で口調が変わるのは気付いているのか、いなのか……。まあどちらでもいいか。

食事の誘いをメリーさんに告げた時はさほどのリアクションも出なかった。意気揚々と面白がって付いてこようとするとさっぱり思っていたから拍子抜けしたくらい。……付いてこさせないけど。

けれども問題はその後、出かける寸前に起きた。

『せつかくのでーと何ですからおめかししないとダメじゃないですか！』

『コートは置いていってください』

『あなたはでーとに武器を持って行くんですか？』

『ルカさんって和服が似合うと思うんですよねー』

適当に身支度を済まそうとした私を、待つてましたとばかりにニコニコ顔で口出ししてくるメリーさん。なまじ言ってる事が正しいだけに逆らうことも出来ず、哀れにも私はメリーさんの着せ替え人形となった。一応、ハンドバックの中にお財布と水筒、そしてナイフを一本入れることだけは許してくれた。

・・・救いがあるとしたら、ちびっ子が寝てて気付かれなかったことね。

それにしても待ち合わせ場所へと着いた時、彼が少しぼーっとしたのが少し・・・いやかなり気になる。・・・そんなに変な格好なのかねえ？

寒さのせいか、それとも他に理由でもあるのか、お互いに無言で夜の街をテクテクと歩いていると、やがて目的地らしいお店が見えた。

むちゃくちゃ高級でも無いけれど、むちゃくちゃ安いわけでもないという適度なお値段のお店と見た。

「ここだね」

ガラガラと扉を開けると、そのまま私を待つてくれる彼。意外と気が利くみたい？

「ありがとうございます」

譲られたので先に中へと入ると、女中さんらしき人に礼をされた

ので微笑みを返しておく。とりあえず笑う、色々あって鍛えられた表情筋はこんなときにも役に立つ。

既に話は通っているのか、彼が名前を言つと和室へと通された。中央にはテーブルがあつて、座布団は向かい合うようにして2つ。窓からは庭の景色が見える。後は壺とか掛け軸とか云々。

座布団に座るとすぐに女中さんが来て飲み物を聞きに来た。

「お酒は平気？」

「はい、種類はお任せします」

「そ、そう・・・じゃ、コレを2本・・・」

「お食事の際、何かダメなものなどはございますか？」

「その・・・蛸は少し・・・」

「かしこまりました」

そう言つて深くお辞儀をすると、静かに襖を閉めて行つた。・・・
メニューは完全にお任せなのかな？

「蛸、ダメなんだ？」

「蛸だけはダメでして・・・」

「へえ・・・たこ焼きとかも？」

「はい・・・」

皆あんな気持ち悪いの良く食べれるわよね・・・。内臓とかどうなつてるのよ、アレ。

その後、何が好きだとか何が美味しいとかの世間話をしていると女中さんが現れて冷酒を置いていったので、すすつとお酌をする。

「本日はお誘いいただきありがとうございます」

「そ、そんな・・・こちらこそ・・・それじゃ、乾杯」

「はい、乾杯」

そういつて二人で笑い合つとお猪口を空にする。
さてさて・・・どうしようか。

トクトクトク・・・とお酌をしながら、この先どうするかを考
える。まさか世間話だけで帰る訳にも行かないし・・・。

「そういえば、お仕事の方はよろしいのですか？」

「うん、今日は休みなんだ」

「そうなんですか、お休みは大切ですね」

「あんまし取れないのが悩みなんだけどね」

彼はそういつて笑うとぐいっとお酒を呑んだので、また注ぐ。あ
まり強くは無いらうのか、顔が少し赤くなっている。

「・・・まだあの宿に泊まってるの？」

「はい、出来る限り出費は抑えたいものですから。何かよろしくな
い噂でもあるのですか？」

「うーん・・・」

「言い辛い事でしたら、無理に言わなくても結構ですよ」

聞いてみると何か言い辛そうにしたので、微笑みながらお酌をし
て身を引くことにする。ちょうど小鉢に入れられた料理も来た頃合。

「いや・・・そういうわけじゃないんだけど・・・ここだけの話、
あそこはあまり良くない人たちが集まってるらしいんだ」

しばし沈黙のまま料理を口に運んでいると、何かを考えていた
らしい彼が言い始めた。あ・・・これ意外と美味しい。

「良くない人たち・・・でしょうか？」

「そう、俺も深くは知らないんだけど、何でもゲリラが隠れ家に
してるとか。ほら、あそこって郊外で安いし……」
「そうなんですか……ソレは怖いですね……」

ゲリラ
魔術師……か。モノは言い様ね。

「だからあそこに泊まるのはあんましお勧めしない」

かなり酔いも廻ってきたのか、口調が碎けて舌の廻りが良くなっ
てきた。

「ですが、そういう人たちを抑えるために寒い中、ああやってお仕
事なさっているんでしょう？」

「うんまあ……そうともいうね」

「では、いざというときは安心ですね」

「いや……まあ……」

照れた様にしてお酒を呑むのですぐに注ぐ。潰す気は無いけれど、
なるべくなら酔いは醒ませたくない。

「そ、そういえば旅をしてるんだっけ？」

「はい、コレまでにも色々なものを見てきました」

相手にばかり余りにも一方的に話させると違和感が起きるので、
こちらのことも話す。嘘は5割ほどで。

私の話に彼がふんふんと聞き入っている暫らくの間にも、少しだ
け焦り始めている内心とは違って穏やかとも言える時間が流れる。

「それじゃこの街にも観光目的で？」

「はい、それもあります……少し、人を探しています」

「人を？」

「赤色のコートを着た女性なんですが、もしかしたらご存じないでしょうか？」

「赤色のコートを着てる女性ねー・・・ちょっと待って」

やっと本題に入るも、彼はうーんと唸ったままで動かない。そして何かを思いついたかのようにして携帯を出すと、微かに震える手でボタンを押し始める。

「あの、気分がよろしくないなら無理はなさらなくても・・・」

「大丈夫・・・大丈夫・・・」

一応形だけでも心配した様子をいっていると、彼は笑って電話先と話し始めた。

うん、うん、という返答をしながらこちらをちらりと見てくる辺り、どうやら状況は芳しく無い様子。

やがて話も終わると、彼は申し訳無さそうな顔をして私を見た。

「仲間内でもわからないって」

「そうでしたか・・・」

「ごめん・・・」

「いえいえ、探して頂いてありがとうございます」

軽くお辞儀をすると、お猪口を空ける。たまには呑まないと不自然になるし、呑まないと少しやってられない。

「あ・・・物知り爺さんなら知ってるかも」

「物知り・・・ですか？」

彼からの酌を受け取りながら鸚鵡返しに聞くと、赤い顔をしたま

ま誇らしげにいった。

「この街一番の物知りだね。知らないことは無いんじゃないかって言われてるから物知り爺さん」

「まあ・・・ソレは・・・」

便利そうな人ね。

「立派な方なんですネ」

「あの人なら何か知ってるかも・・・ちょっと待って、今何か書くもの探すから」

「ありがとうございます」

彼がごそごそと懐や部屋の周りを探し始めたので、ふと窓のほうを見ると見覚えのある顔が見えた。雪の様な白い肌に緋色の瞳、そして銀色の髪をポニーテールにしている彼女は、雰囲気が何処かアリスに似ている。だけどソレよりも何よりも、ここにアリスは居ないし居るはずがない。そして、そいつはメリーさんにそっくりだった。

メリーさんらしき誰かは私と目が合うと、ゆっくりと窓の下へとフェードアウト。窓からは揺れているポニーテールの先が見えるだけとなった。

「メリーさまメリーさま、ユメもユメもー」

「しーっ、ユメさん静かに・・・」

少し耳を澄ませば、ちびっ子の声まで聞こえてきた。うん・・・幻聴が聞こえるだなんて・・・私ったら・・・酔ってるのね・・・。内から湧き上がるものを抑えるために、自然とお酒へと手が伸びる。

「書けた書けた・・・どうかした？」

「申し訳ございません・・・少し気分が悪くなりまして・・・」

「ああ、うん・・・無理はしないで？」

「はい・・・少し席を外しますね」

部屋から出る時に彼へと軽くお辞儀をしてから襖を閉める。完全に閉まりきったことを確認すると、静かに素早くダッシュ！

目指すはお手洗いだから別に嘘はついていない。到着と同時に水道の蛇口を全開にすれば下準備は完了。

目的は・・・ネズミの駆除？それにしても、捻れば水が出るってのは本当に便利。昔の人に伝えたいくらい。

「まあ・・・純度は良くないけれど・・・」

流れていく水を眺めながら一人自重めいた晒いをこぼすと、指をぱちんと鳴らした。目立ちたくないなので呪文は唱えない。

すると、水は何かに導かれるかのように宙へと浮くと、トイレの窓から飛んで行く。

その光景を確認してから蛇口を閉めると、部屋へと戻る。

私が戻ると彼は何処かそわそわしながらお酒を飲んでいたが、私に気付くと少しだけ身を乗り出した。

「だ、大丈夫？」

「はい、ご心配頂きありがとうございます」

ちらりと窓の外へと視線を送りながら座布団に座る。

「そうそう、物知り爺さん何ただけだね・・・」

「はい」

ふんふん、ふむふむと彼の書いた地図を一緒に覗きながら頷いていると、顔の真横から視線を感じたので彼を見る。すると、すごい勢いで赤い顔を地図の方へと向ける。

「どうかなさいましたか？」

「な、何でもない！ソレでね・・・」

「・・・そうですか」

少し気になったけれど、何でもないと云うのだからそうなんだろうね。再び、ふんふん、ふむふむと続きを聞く。

「お教え頂きありがとうございます」

「いやいや！こちらこそありがとうございます」

「・・・？」

「い、いや・・・何か良い情報が見つかるの良いね」

「・・・そうですね」

そういえば外のネズミはどうしたのかな？と思つて耳を濟ませると、小さく『こうなれば合体攻撃です！行きますよユメさん』とかへ？う、うん・・・』とか聞こえてきた。

・・・楽しそうで何よりで。そのまま一緒に逝けばいいのに。

「あの・・・平気？」

「・・・大丈夫です。そういえば、ネズミは好きですか？」

「ネズミ？」

「はい、ネズミです」

くすりと笑うと、彼が外のネズミに気付かないようにと世間話を始める。

無理をしすぎたらしく、そこで私の意識は一旦切れる。

気が付くと、和服とメイド服の二人が夜の街を全力で駆けて行くのが見えた。・・・少しは隠れる。

その背中に向かって視線で物体は殺せるか？を実践していたけれど、彼がお店から出てきたので止める。

そういえばここは何処だろうと振り向けば数時間前に見かけた料理屋。どうやら外に居るみたいね。

なにやら、素敵な思い出を共有しましたので・・・とか頭が沸いてるのじゃないか？と思われる発言が私の口から漏れた様な気がするけど気のせいでしょう。気のせいよね？・・・なんだか頭が痛い。

「ごめん、待たせたね」

「いえ、夜風は好きですので」

にっこりと微笑むと、夜の街を歩き始める。既に深夜とも言える時間帯の街はとても静か。

自然と私の口数も少なくなり、それに合わせたのか彼も静かになった。

静かな夜道ををのんびりと歩いていると、まるで何処か別の世界へと連れてこられたみたい。けれども、ここに紅白の魔法使いが出ることは無いでしょう。

検問所のあった辺りを通るけれど、さすがに深夜は労働時間外なのか誰もいない。ザルな警備ともいえるけれど・・・ここは形式だけで本命は別のところに居るんでしょうね。

やがて、会話も無いまま私たちが泊まっている宿へと着く。

長方形の箱を縦に4つ重ねたような見た目で、クリーム色の壁が薄闇にぼんやりと見える。宿というよりはただの四角い箱、というのが着いたときの私の感想。

けれども、正面くらいは外見も気にしているのかとどこころ木が生えている。裏には駐車場があつてそれ以外はほぼ林。本気で営業する気があつたのか気になる立地ね。

「本日は送つてまで頂きありがとうございます」

「いやいや！何事も無くてよかつた」

「では、道中お気をつけて。おやすみなさい」

「おやすみ」

簡単に別れを告げ、お辞儀をしてから中へと入る。

宿の中身も、1階こそ違えど2階以上は外見を見れば予想できる構造で、通路の両側には部屋が付いている。まあ、1階も小さな口ビーがあるだけで後は一緒なのだけれど。

トイレもお風呂も部屋付き。食事は自前、サービス皆無という素敵なお値段の宿。きつとここで殺人事件がおきても気に掛ける人は居ないでしょうね。

たぶん部屋の中も私たちと一緒に、玄関の正面には6畳ほどの広さで最低限の家具しかない和室、両脇にトイレと台所の構造。通路でT字が書けそう。

そしてここの一帯の問題点だけれど、なんと階段が端にある1つしかない。おかげで一番遠い部屋に泊まると、景色もさほど変わらない長い一本道をただひたすら歩かせられる。何を考えてこんな形にしたんだろ・・・というより、非常事態にどうやって逃げると言うんだろ？

そんなことを考えながらかつかつとコンクリむき出しの階段を都合4階分上る。私たちが泊まってるのは一番上の一番奥。つまり、一番逃げられない所。

「ただいま戻りました」

扉を開けた私を最初に出迎えてくれたのは、驚いた顔のままどこちらを見て固まっているちびっ子の姿。

「……？」

ああ、戻ってなかったか。

「ユメさんが驚くのも無理ないですよー。着替えさせた私も一瞬誰かわかんなくなりましたし」

「……それはどういう意味で言ってるわけ？」

どうやら何時の間にやら私は変装の名人になったらしい。怪盗にでも転職しようか？

部屋に入って寝巻きに着替えようとすると、どうやら電源が入った様子でユメが起動を始める。

「ちょっと！帯引つ張るのは止めなさい！」

「ルカって和服着ると別人みたいになるのですね！」

「よしちびっ子、今すぐさんを付ける、さもなくばその頬を伸ばす」

「やー！……いひゃいひゃい！」

伸ばしたり噛まれたりする激戦を片手でしながら、メリーさんに彼から貰ったメモを渡す。

「コレ、収穫、情報、情報」

「わかりましたけど……なんで片言なんですか？」

噛まれてる手が痛いんだよ！こんちきしょう！

「わかった……わかったからちびっ子、噛むのを止めなさい。ど
うどうどう……」

「むー！」

さて、噛まれた結果唾液でべとべとになった哀れな手はどうしよ
うか？と思うも良い手は浮かばない。しょうがないから、なるべく
片手だけで着物を脱ぎ始める。

「……脱いじゃうのですか？」

「何よ、悪い？」

「せつかくお嬢様みたいなの……いひゃいひゃい！」

第2回戦が始まる。口は災いの元よ、ちびっ子。

「ど……どうどうどう」

「むー！」

第2回戦は5秒で終戦。コレ以上続けると私の指の本数がキリの
悪い数になって、脳内にエマーゲンシーコールが鳴り響いてしま
う。人質を取るなんて卑怯だと思わない？

「ル、ルカさん……！」

「何？どうかした？」

「このメモ……全く意味がわかりません！」

「……言っただけじゃなかった？」

「言っただけじゃなかった」

「そう……」

簡単にメリーさんにメモの説明をする。片手しか使えない都合上、手早く脱ぐことが出来ないから着物が肌蹴た姿のまま。肌蹴た姿のままです！

・・・私、何やってるんだらう？

「つまり、ここに行けば何かわかるとー？」

「わかるかも・・・ね」

「ひゃにひゃにー？」

ちびっ子が喋るたびに私の指に生暖かくてぬめぬめしたものが当たる。そりゃ私の指に噛み付いたままで銜えっぱなしだものね・・・私の指の何が美味しいのか。最悪、そのままぶっちんとするのだけは止めて欲しい。

それにしても、半裸でちっちゃん子に指を舐められているこの現状・・・ハハッ、あの子に見られたら殺されそう。

メリーさんがちびっ子にもわかるように噛み砕いて説明すると、ふんふんぶむぶむと頷きながら聞き入っている。あれ？コレ指抜いてもいいんじゃないかな？

「・・・っ！」

「どうかしましたか？」

「い、いや何でもない」

ゆっくりと抜こうとすると、思いっきり噛み付かれた。咄嗟に動きを止めると噛み付いたところを撫でるように小さい舌が這ってくる。何？何がしたいの！？何の意図があって私の指を銜えるわけ！？危なく指がぶっちんするところだったじゃない！

「・・・」

「ん・・・」

軽く第一関節を曲げてみると、上目遣いにこっちの方を見ながら
ちろちろと舐めてくる。・・・何この状況。

誰か助けて・・・本気で。

「メリーさん・・・ちびっ子に何か教えた？」

「ナ、ナンノコトデシヨウカー？」

さつきからニヤニヤとしている奴に聞いて見ると、そいつはワザ
とらしくひゅーひゅーと吹けない口笛の真似をしながら窓の外の方
を見た。

・・・なんだか突っ込んだら負けな気がしたので、ちびっ子と目
を合わせる。

「むー？」

「いい、ユメ？ずっとこのままでも居られないし、もう離してくれ
ない？」

「むー・・・」

「ね？良い子だから」

頭を撫でながら誠心誠意を込めて言うと、渋々といった感じで私
の手を開放する。本気で何を教えたんだこの人は・・・。

何はともあれ、コレでやっと着替えれる・・・。よだれとか、も
ういいんじゃないかな？

「ところでちびっ子、メリーさん？聞きたい事があるんだけど」

「はい？何でしょうか？」

「庭で、一体何してたの？」

「・・・」

「・・・」

二人とも沈黙したままで私と視線を逸らす。

「な、に、し、て、た、の？」

「ひゃ……」

精一杯の笑顔を作つて問いかけると、ちびっ子が小さく声を漏らした。

「そ、そんなところ行つてませんよ。ね、ねえ？ユメさん？」

「う、うん……」

へー、行つてないのかー。

「そう……ところで知ってる？カビつて湿度の高いところで生えるんだつて？」

「……」

「最近はずっと乾燥してきたけれど……この時期でも濡れたまま乾かない服とかあつたらどうなると思う？」

湿つたままの服……ちゃんと乾いたらいいよねー？と遠くを見ながら呟くと、二人の顔色が目に見えて悪くなった。

「……ごめんなさい謝りますからからカビだけは止めてください」

「何で謝るの？行つてないんですよ？」

「い、いやー……ソレはそうなんです……あははー……」

乾いた笑いをこぼしているメリーさんを同じく乾いた視線で見つめる。

見つめる。

見つめる。
見つめる。

「ごめんなさい見に行きました・・・で、ですが！それもコレもユメさんが見たいって言うからですね！」

「メ、メリーさま！？メリーさまだつてもう一度見たいって・・・」

「ユ、ユメさん！ソレを言ったら・・・ひっ」

「へー？そうなの。人が何とか足がかりを掴もうと苦労してる間に・・・それはそれは楽しそうなことして・・・本当、私も混ぜて貰いたいくらい」

「・・・」

「いい？別に見に来たから怒ってるわけじゃないの」

一つため息を付くと、しょぼんとした様子の二人を見ながら告げる。

「街に入ったときに決めたでしょ？二人とも目立つんだから不用意に動かないって」

見つかって騒ぎになるとか・・・洒落にならないわよ。今までの努力が全て潰れるじゃない。

「ごめんなさい・・・」

「・・・まあいつか。何事も無かったし」

そう告げると布団の中に潜る。

正直、今日は疲れた。

「あのー・・・ルカさん？」

「んー？」

「服は・・・どうしたら・・・？」
「外にでも干しとけば明日にでも乾くでしょ」

カビらせるとか、本気でするわけないじゃない。そもそも出来ないし。

そのとき二人がどんな顔をしていたのかは、溶ける様にして意識がなくなった私にはわからない。

街灯も無い、月明かりだけが頼りとなる深夜の街を三人で並んで歩く。動く時は三人一緒にするのが無言で交わされた約束。

そうすると、眠り姫を守る人が居ないのだけれど・・・まあ平気でしよう。

一昔前は魔術師を名乗っていた人たちが住んでいたと言う地域に今見えるのは、朽ち掛けた住居にコンクリの壁やら、雑草の伸びまくっている庭ばかり。・・・人の住んでいる気配は皆無と言っているわね。

私たちの泊まっているところを街外れと呼ぶなら、今歩いているところは・・・廃墟？

物知り爺さんという名のセクハラ爺は、私が訪れるとすぐに魔法使いのことを連想したらしい。

そんなコート着てる奴はこの街にはそう居ないとか何とか。二言目に、私は安産型のお尻だとかのたまったので、危なくその少ない寿命を縮めて新世界に蹴り落とすところだったけれど。

どうやらお爺さんと魔法使いはそれなりに親しい仲の様で、泊まっていたらしい場所のこともあっさり教えてくれた。

ただし、最後に来たのは3日程度前・・・今も居るかどうかは行

って見ないとわからない。

というより、情報駄々漏れなんだけれど・・・いいの？

「人気が全く無いのですね」

「深夜ですからねー。皆さんおねむ何でしょう」

「ふむふむ」

「ユメさんはまだ平気ですか？」

「だいじょぶー」

二人の気が抜ける様な会話が夜闇に響く中、どうやら目的の場所に着いた・・・かな？

いささか信じられないので、何度も地図とその家とを見比べる。

「ここ・・・ですか？」

「ここ・・・だと思っ」

「ぼろぼろー」

着いた家は辛うじて雨風が凌げるかな・・・？と言える元家らしき2階建てのコンクリの箱。壁にとりどころ穴が開いてるし、風は凌げないか。2階に至っては屋根すらも無い。

それにしても、何でこんなところを選んだんだろ。五十歩百歩とはいえ、もっとマシな家はそこら中にあるのに。まさか現地住民に気を使ってるって事は無いでしょう。

メリーさんも同じ感想らしく、表情がよろしくない。ちびっ子はとろんとした目でその家を見つめ・・・も、もしかして眠いの？

「ま、まあ何か理由があるかもしれないですし・・・入ってみますか」

ランプを手に恐る恐る先導を切って中へと入ってくメリーさん。

何があるかわからない、というのが一番怖い。

ランプで照らされた1階の部屋には、腐った椅子やテーブルに壊れたテレビ、他と比べると綺麗なクローゼットに少しだけ違和感を感じるも、外見と対して変わりはないわね。つまり生活感皆無。

2階は・・・正直あまり行きたくない。何でこの家壁はコンクリートの癖に階段は木製なのよ！

パッキンパッキンと腐りかけた椅子やテーブルをユメが壊して遊んでいる音を背景に、二人で顔を見合わせる。

無言で交わされる議題はもちろん・・・どちらが先に2階へと上るか。

メリーさんの目に断固として引かない意思が見えるし、当然ソレは私にもみえているでしょう。つまり議論は平行線。決着をつけるにはアレしかない。

さっとお互いに飛びのいて距離を取ると、右拳を腰の後ろに隠す様に構える。メリーさんは左手で右手を包み込む構え。

「むー？」

お互いに緊張が走る中、私たちの様子をちびっ子が不思議そうに見ている。

後は何かきっかけさえあれば・・・戦いは始まる。

「・・・へっくち」

ちびっ子がくしゃみをした瞬間、私たちは同時に動いた。溜めていた拳が突き出され、勝負は一瞬で終わる。

「そんな・・・」

「ふっ・・・強敵でした」

ゆっくりと崩れ落ちる私と、勝ち誇った様子で不思議そうに私を見ているちびっ子の頭を撫でているメリーさん。今この瞬間、明暗が明確に分かれた。

私が出した手はグー、対するメリーさんは・・・パー。
つまり、私が上らないといけない。

「ではではがんばって下さいねー」

「コレ・・・ホントに平気だよね？」

「大丈夫ですって！ユメさんもそう思いますよねー？」

「ねー」

適当なことを言いながら、笑顔で顔を見合わせる二人。畜生・・・登らない奴は気楽でいいな・・・。

目の前にあるのはいかにもな外見の階段。雨風に晒された木は既に変色して独特な色合いになっていて、コイツはかなり拙いぜ！と私の第六感が告げている。というか、正常な感性の持ち主なら一目見ればわかる。

でも悲しいけど・・・私たちの追っている奴は正常とは言い難いのよね。

ここで何時までも怖気づいていても何が変わるわけでもないし、気合を入れて行くことにしよう・・・。

一步、月明かりに照らされている階段へと片足を乗せると、とても柔らかい感触。うわ・・・ギシツといった。

二歩、もう片足を次の階段に乗せる。壊れる気配は無いし・・・意外と平気かも？

三歩・・・四歩・・・となるべく衝撃を与えないように一歩ずつ登っていく。

そして五歩目に嫌な予感がして後ろを振り向いた時・・・その瞬間が来た。

私の命綱である木の板はもう限界とも言える様な切ない音を立て、

後ろを振り返った私を地の底へと叩き落とす。

せめて柔らかいところに落ちますように……。

祈りも空しく、私の身体を衝撃が襲う。

「うわー……綺麗に落ちましたね……」

「ルカ!？」

「あ……ユメさんそっちはあぶな……」

けれども、落ちた私を追撃する影があった。何を考えたのか、ちびつ子が階段をぶち抜き、哀れにも衝撃で動けない私に止めを刺そうと落ちてきた。

私が何をしたというの……。

ゆっくりと、時間が止まったかのように落ちてくる死神を見つめながら、心で涙を流す。

そして言葉に出来ない痛みが腹部を襲って、私の意識は途切れた。

あ、今アリスと通じ合えた気がする。

「ルカさーん?生きてますかー?」

ふふ……全く甘えんぼさんなんだから……。

「ちょ、ちよつとルカさん!？」

腕を伸ばしてアリスを抱きしめると、とてもやわっこい感触。あ
あ……至福の瞬間。

けれども、その至福はすさまじい痛みを伴って消えていった。

「目は覚めましたか？」

「・・・はい」

痛みで目を覚ますと、数センチ先にメリーさんのニコニコ顔。ヤバイ・・・すつげえ怖い・・・。

余りにも見てられないので視線を横にずらすも、あるのはただ闇だけ。

み、味方は！？味方はいないの！？

「目を覚ましたなら、手を離していただけるとありがたいのですが？」

「ひっ・・・は、はい・・・」

慌てて手を離すと、どうやら離れ際に鳩尾に一発入れた様で痛みで悶絶した。

「だいじょぶー？」

「だ、だいじょばない・・・」

鬼が去ってから差し出させたちびっ子の手に捕まって立ち上がってみれば、さつきまで居た部屋じゃ無いみたい？・・・暗くてよく見えないけれど。

「ここは・・・？」

「地下室みたいですねー、どうもここで生活してたみたいです」

何処からかメリーさんの声がすると、明かりが灯された。

見えてきたのは割れた皿やまだ綺麗なベットに机。空になった缶

詰とかガスボンベの缶等など……。

生活感は溢れてないけれど……上よりはマシね。そういえば埃も無い。

壁にはチョークで地図らしきものが殴り書きされていて、その地図の上のほうに銃痕がある。コレって、もしかするとアレよね？

「ルカさんルカさん、旅をしてたって言ってましたよね？その行き先ってどうやって決めてました？」

その銃痕を見ながらメリーさんがポツリと聞いてくる。

「……分かれ道があれば棒倒し、水の流れに街はある、道の先には何かがある……ね」

「どづいつことー？」

「つまり適当」

何も無い天井を見ながらちびっ子に答える。

つまりここに居た奴は壁に地図を描いて、適当にぶっ放した弾で行き先を決めたわけか。しかも……よりもよって北の方に……。

「北……ですか」

「さむーいところなのですか？」

「さむーいところなのです」

まあ何にしても、ココにはもう誰もいないし誰も来ないでしょう。行き先を決めた以上、其処に留まる事は無いのだし。

用は済んだのでそろそろと家から出る。どうやらクローゼットの中に入り口があったみたい。

大体1時間程度しか籠っていなかったはずなのだけれど、なんだ

か外の空気がとても新鮮に感じられる。足元が抜ける心配をしなくて良いつて・・・すばらしい。

他の二人も同じ気持ちなのか、思い思いに伸びをしたり空を見上げたりして地上へと出た喜びを表している。私も釣られて空を見上げると、其処には降ってくるんじゃないかと心配になってくる星空。

この星空を見るためにこんな廃墟に居たって可能性は・・・否定できないかな。

「ここでなにをしている！」

そんな気の抜けたことをしていたら、突如罵声とライトを向けられる。・・・お家に帰るまでが遠足なのに、最後の最後で気を抜いた。

見れば黒い軍服と小銃アサルトライフルを構えている男たちが都合四人ほど。残党狩り・・・でもなさそうだし、見回りの連中かな。

「私たち廃墟を巡る旅をしまして、ここにもあると聞いたので見て回ってたんです」

笑顔で息をするようにさらりと嘘をつくメリーさん。こういう手腕はさすが。

相手さんもその笑顔に毒を抜かれたのか、若干緊張を緩め、その後になにやら嘗め回すような目つきで此方を見てくる。

「ボディチェックをする・・・両手を上げて後ろを向け」

「はいはいー」

大人しく両手を上げて後ろを向けば、無遠慮に私の体をまさぐって来る誰かの手。

「やつ……」

隣でちびっ子の小さい声がした。こいつら、子供でもお構いなしなのか？

暫らく大人しくしていると調子に乗ったのか、手がコートの中にまで入ってきたけれど、目を閉じて無反応を貫く。まだ我慢できる範囲内だし、あまり事を荒らげたくない。

そしてその手がコートから服の中へと入ろうかとした瞬間、ちびっ子の後ろに居た男が吹っ飛んだ。

……限界か。

閉じていた目を開くと、後ろであっけに取られている男を裏拳で殴り飛ばしてからナイフを抜き、メリーさんの方に居た奴の首を切り裂く。血を吹きながら倒れるそいつの拳銃を抜いておくことも忘れない。

私たちの動きを見張っていた奴が小銃を構えるけれども、地面から生えてきた触手がそいつを叩き潰した。後に残るは潰れたお肉と骨の塊。

け、結構えげつないのね。

「ご、ごめんな……」

「もう大丈夫です。よくがんばりましたね」

メリーさんがちびっ子の体を抱きしめながら落ち着かしている中、倒れた衝撃と突然の仲間の死にまだ体が付いていけない男へと歩き寄り、逃げないように踏みつける。ちびっ子に殴られた奴の止めは……一応しておこうかな。

「た、たす……」

ちらりと動かない男のほうを見てからそいつの頭へと銃を向ける

と、何かを言う前に引き金を引いた。
静かな廃墟に数発の銃声が響き渡る。

「コレからどうする？」

「ここには居られませんし・・・移動してもいいんですが・・・」

中身の無くなった拳銃を捨ててからメリーさんに聞くと、少し齒切れの悪い返答を残して夜空を見上げる。

そして、悲しいことに私には彼女の齒切れが悪い理由が何となくわかってしまった。

「彼のことなら気にしないで」

「ですが・・・別れとか色々必要じゃないですか？」

「いいよ。別れ話とか嫌いだし・・・それに」

『...ばい...ばい...ルカ...さん』

頭にこびり付いたまま離れないあの子の声を思い出しながら、にっこりと微笑む。

「これ以上、ここに留まる必要は無いでしょ？」

ちょこちょこ支度はしていたけれども、いざ出発となると色々買い足さないと行けないものがある。主に食べ物とか。

そんなこんなで動けないまま、2日が過ぎた。

目撃者は全員喋れない状態にしたのだけれど、念には念を入れるとか何とか、外出時には和服にならないといけなくなったのがとて

少し錯乱気味のちびっ子を抱きしめて落ち着かせると、怪我の有無を確かめる。服が赤く染まっているのは・・・私の血かな？何にしても、怪我は無い様で何より。

「撃たれたんですか？止血しますから、見せてください」

二度、三度とドアが叩かれる中、メリーさんが撃たれた部分を治療し始める。ドアの外からは開かないとか魔術師だとか騒いでいるのが聞こえてくる。

「結界はどれくらい持ちそう？」

「即席ですから・・・そうは持たないですね」

「正面突破はどう？」

「破られた瞬間に弾以外のものが飛んでくる可能性もありますから、あまり現実的じゃないです」

「・・・あの触手は？」

「あの子達は地面が近くないと呼べないですから・・・少なくともここに居る間は無理ですね」

「そう・・・」

そんな中を眠り姫を連れて逃げ出さないといけないわけか・・・。良い状況とは言えない。

治療も終わったようなので立ち上がってコートを着込むと、ビール紐を箆笥の足に結びつける。途中でほどけられたら洒落にならないので、左手と歯を使ってしっかりと結ぶ。

「何するんですか？」

「ちよっくらドアの向こうの連中に挨拶してくる」

「ダメなのです！」

悠々と準備をして窓へと向かおうとしたら、ちびっ子に裾を掴まれた。

「ルカは怪我してるのですよ！？そんな危ないこと・・・」
「怪我してるからよ」

思わず晒いをこぼしてからちびっ子へと向き合つと、彼女は驚いたように目を見開いた。

「もしも耐え切れないで正面突破となつたら、私が一番足手まといになるじゃない。だったら、捨て身の役は私がするのが最善でしょう？」

「で、でも・・・」
「いい、ユメ？」

理屈でわかっているとしても、感情が納得しない様子のちびっ子と視線を合わせる。

「あなたは私が死ぬとも思ってるの？」
「・・・思っていない」
「それじゃ、私が少しだけ留守にする間、皆を守れる？」
「・・・うん」
「いい子ね」

こくん、と頷いたちびっ子を撫でながら立ち上がり、水の入った小瓶をポケットへと入れると、割れた窓ガラスの外へとビニール紐を落とす。

「そんな訳で少し出るわ。出来る限り早く帰るつもり」

「お帰りの際はお風呂にしますか？ご飯にしますか？それとも・・・？」

「暖かく出迎えてくれると嬉しいかな？」

そういつて笑うと、紐を持って窓から飛び降りる。

どうやら外にも居るらしく、飛び降りている私を狙って銃声が聞こえてくる。

減速のためにとまって持っているビニール紐は、摩擦で擦り切れた血で滑って狙ったほどの効果は期待出来そうにない。

何とか地面に着地してから、木陰へと転がり込むと銃弾が飛び交ってきた。ヒビでも入ったのか、足が熱と痛みを持った自己主張をし始める。

まあ・・・意識さえあれば動くし問題は無いか。

とにかくここで立ち止まっている訳にはいかないので、銃声が止んだ隙に割れている窓から中へと転がり込む。

受身も取れずに畳へと落ちれば、口の中に広がるのは鉄の味。

見れば止血した傷が開いた様で右腕からはじわりと血が染みまわっている。

好都合なので体を起さずピンを開けると、染みている右腕へと水を流しかける。血を使うのはもっともわかりやすい禁忌の証・・・か。

『・・・遠き日の思い出をこの手に』

静かに呪文を唱えてから指を鳴らすと、すぐに霧が立ち込めて来て、やがて数センチ先すらもよく見えなくなった。

私はそれを確認すると、頭痛が酷くなっていく頭を抑えながらゆっくりと立ち上がって歩き始める。

「・・・あはっ」

屋内だと言うのに、昼間だと言うのに・・・霧の中に月が見えて、思わず笑いがこぼれる。

・・・いけないいけない。誰も聞いてないとはいえ、淑女たるものそう易々と笑いをこぼしてちゃダメ。

足を引きずりながら廊下へと出ればそこにも霧は立ち込めていて、足元には少しづつ量が多くなっていく水の流れ。時々何か跳ねるような音が小さく聞こえてくる。

転ばないようにゆっくりと、1段1段踏みしめるようにして階段を上っていくと、目的の階へと着いた。

件の連中は突然現れた霧に警戒を強めている様子だけれど、その程度の警戒じゃ何の意味も無い。

静かに一人の下まで駆けると、その首目掛けてナイフを振りぬく返す手で他の奴の背中へと突き刺せばプリンを貫くような柔らかい手ごたえ。そのまま二人とも静かに崩れ落ちた。

異変に気付いたらしい一人が小銃を構えようとするのを腕を切り落として止め、もう片方のナイフを頭へと振り下ろす。

後は扉を見張っていた最後の一人の首を後ろから切り落とせば処理はおしまい。

頭に刺したナイフを回収していると、待つてましたとばかりに水の流れが次々と死体を飲み込んでいく。

くちやくちやくきばきばきと死体を咀嚼する音が鳴る中、不意に体を支えきれずに壁へと寄りかかる。走った反動で足と頭が痛い。

「大丈夫だから・・・食べるなら早くね」

咀嚼を止めて心配そうに此方を向いた人魚へと告げると、月から逃げるように目を閉じる。何も見えない身体に、霧が纏わり付いて来るのが少しだけ心地よい。

やがて全て終わったのか、目を開くと血溜まりだけが残っていた。

さてさて・・・どうしようか？

ぱちんと指を鳴らして霧を晴らすと少し考える。

目の前には結界で封印されたドア、当然ながら普通に開けようとしても開かない。かといって大声を上げてメリーさんたちに呼びかけるものも・・・何か嫌だ。そうとなれば・・・。

うん、強引にこじ開けることにしよう、そうしよう。

そう決めると目の前の扉を見つめ、隙間へとナイフを差し込む。

そのまま隙間をなぞる様にして動かせばあら不思議。ここでも動かないと思われた扉が開き始め・・・。

始めた瞬間、中に居たメイドの誰かさんがドロップキックを入れてくれた。

当然、暖かい歓迎の言葉が来ると思っていた私は、ぼろきれの如く壁へと叩きつけられて意識を手放しかける。

「わ・・・わっ・・・！メリーさま！メリーさまー！」

そのまま誰かさんに足を掴まれるとずるずると部屋の中へと引きずり込まれる。傍から見たら殺人を隠そうとしてる状況に見えるに違いない。未遂だけだ。

「ありやいやー、コレは折れてますねー」

「ず、随分と暖かみのある出迎えね・・・」

それはもう、暖かすぎて寒くなるくらい。

「ごめんなさい・・・」

「まあまあ、ユメさんも悪気があったわけじゃ無いんですからー。・・・それにしても、また随分と無理しましたねー」

笑いながらも処置を進めていくメリーさん。早いか遅いかは・・・

比較する対象を他に知らないからわからない。

出来れば痛みも和らぐようにして欲しいのだけれど、笑ってスル
ーされた。

「一通りは終わりましたけど・・・あくまで応急処置なんですから、
あんまし派手に暴れちゃダメですよ?」

「りょーかい」

「ではでは、私は荷物を持ってきますから少しお待ちを」

「ほら、いつまでしよげてるの」

奥でござとそとし始めるメリーさんを眺めてもしようがないので、
ちびっ子の頭を撫でると立ち上がって数歩歩く。多少はマシになっ
たかな?

「ルカ、ルカ?」

「んー?」

「・・・怒ってない?」

「・・・怒ってる」

「いひゃい!いひゃいです!」

びょーんと伸ばしながらメリーさんが来るのを待つ。それにして
もまさか荷物って・・・眠り姫のことじゃないよね?

そんなことは無かったようで、数秒もするとバックを背負い眠り
姫を抱えた割烹着が現れた。改めて見るとすごい組み合わせね。

「ではでは、しゅっぱーっ」

状況がわかってるのかわかってないのか、メリーさんはのんきな
顔で出発の合図を出す

先頭をちびっ子、中間をメリーさん、殿を足手まといと言っ3人

パーティーで廊下をぞろぞろ歩く。穴は後ろだけけれど、奇襲を掛けるには何処かに隠れているか、壁のぼりでもしないと無理ね。

別室の扉が開いてたのでちらりと見れば、子供も大人も関係なしに死んでいるのが見える。どうも泊まつてる人は無差別に襲ったみたい。銃声が小さかったのもそれが理由か……。

「無差別ですか……どっちが危険なんだか」

ポツリとメリーさんが呟くのが聞こえる。

その後は何事も無く1階まで降りられた。来るときも感じたけれど、ここに来ている人数はさほど多く無いみたい。なるべく穩便にしたいのかな。

「待つてください……」

階段の一番下へと着いたとした瞬間、ちびっ子から制止が掛かる。

「居る？」

「二人、こつちに来ています」

まあアレだけ目立つことしたんだし、増援も来るか。けれど増援も少ないし、やっぱり大手を振って大々的に来てる訳じゃないみたいね。

「どうする？2階から飛び降りる？」

「そうですね……」

「ユメに任せてください」

二人して悩んでいると、ちびっ子がにこりと笑って居なくなった。それは文字通り、消えたと言っていいほど。

慌てて通路から覗くと、一人はすでに倒れており、凍ったように固まっている最後の一人をちびっ子が砕いているのが見える。きらきらと、数秒前まで人だったはずの赤い破片が通路に広がる。

「……」

「終わりました」

「い、行く？」

「そ、そうですね……」

褒めて褒めてーとばかりに近寄ってくる、ちびっ子の冷たい頭を撫でながらメリーさんに言って歩き始める。も、もしかすると、この子が一番危ないのかもしれない……。

溶けて肉片となった欠片が散らばる通路から、誰かさんが動かぬ体となって転がっている部屋へと入れば、駐車場が開けた窓から見える。何を考えて窓の先を駐車場にしたのかという疑問はあるけどこういうときはありがたい。

後は車へと乗り込んで逃げるだけ……なんだけど。

「居ると思う？」

「居ると思います」

「だよねー」

「むー？」

絶好の開けた場所に見えるのは、逃げようとして失敗した様子の誰かさんの死体。部屋の中から撃たれたんじゃないのなら、どう見ても待ち伏せされてるよね、コレ。

中にも死体、外にも死体。連中は素人を巻き込んでまで魔女狩りを進めたいのか。

「ということで、第一回作戦会議を開催しますー」

「わーわー、ぱちぱち」

出来る限り窓から見えないようにして、メリーさんが作戦会議を始める。

「まずユメさんが車まで行ってドアを開ける・・・出来ますか？」

「出来るー」

「うむうむ。次に私とルカさんが車までダッシュ！完璧な作戦ですね！」

作戦ですら無かった。

ところで10秒で終わる会議は会議と呼べるんだろうか？

まあ・・・他に案も無いんだけど。

「ではではー、始め！」

メリーさんが告げた瞬間、ちびっ子の姿が消えた。続くようにして窓から出れば、既にドアに手を掛けて開けようしているのが見える。走る私たちを守るように触手が壁を作っていく中、やっぱり足の怪我が響いてるのか、メリーさんのほうが前を走っていく。

私を守っていた触手が居なくなっただので、触手連中は眠り姫を守ることに全力みたいね。

それでも全力で駆けて、あと少しで車に着くと言った所まで何とか来たところで、大きな銃声と共に私の体を衝撃が襲った。

「ルカ！」

胸から赤い何か吹き出て、崩れていく私の体をちびっ子が車の中へと放り込めば、そのまま扉を閉める事もせずに急発進を始めた。

「ユメさん止血を！」

「ルカ！意識を手放しちゃダメなのです！」

二人の声が無処か遠くに聞こえてくる。

途切れ途切れになる意識の中で。浮かんだのは、ちびっ子でもアリスでもメリーさんでもなく。何処か寂しげにくすりと笑うアイツの姿だった。

旅に危険は付きものです（後書き）

1ヶ月近く間が開きました

お久しぶりです

なるべく早く書くとか言って1週間も掛かるんだね、馬鹿だね

今回お友達が多忙に付き誤字チェックを自前でしたので少し甘いかも？

さてさて、世の中にはあとがきから読む人とあとがきを最後に読む人、あとがきは読まない人の3種類が居ると思います
つまり大事なことは前書きに書けということですね！
つまり考えたネタは前書きにばなせということですね！
気分転換なのでつまらなくても気にしない

まあ後は近況報告なので興味の無い人はスルーしてください
さてさて、季節の変わり目は調子を崩すといいますが・・・

中の人は首が回らなくなりました

一時右腕が上がらなくてこいつは拙いぜ！とかのんきに言ってたんですが、今回は首が回らなくなりました

もうね・・・90度も横向けないんだ・・・

身体を回さないと私の視界は前方180度のみで出来ています
回すとパキツとなりますし、こいつは拙いかもしれないぜ！

それが原因かどうか知らないですが、精神状態もあまりよろしくないです

どうでもいいことにイラッ とする日々

愚痴る訳にもいかないですし、あまりに酷いのでネット上でも変なことは言わないように気をつける日々

まあ、何がいたいかとすると、次話は遅れると思います
方針は決まってるんですが・・・ネタが・・・出ないんです・・・
めっさ短いのは避けるようにしますので、ゆるりとお待ち頂けたら
幸いです

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

治療は用法用量を守れる正しい人にして貰いましょう(前書き)

微と徴を間違えないようにと、高校生の時に先生が言ったことがあります。

その覚え方は当時高校生だった私たちの脳内に深く染み付き、今でも微という字を見るたびに思い出します。

悲しいことに、私は微妙の妙を忘れたからテストでは全く使えなかつたんですが・・・

その別々の漢字を間違えずに覚える方法は・・・

『パイ子さんの、おっぱいは、微妙』

関係ないですが、私は理系へと進みました

人物表

メリーさん

幽霊 すきすきーな人ですが想いが通じる日は来るのか来ないのか

叶^{カナエ}夢^{ユメ}

ちびっこメイドさん 昔はヒロインでした キャラは違いますが

ルカ

魔法使い 前作主人公 光の速さで明日に向かって一足お先

治療は用法用量を守れる正しい人にして貰いましょう

宿の屋根の上で沈んでいく夕日を見つめていると、胸に鋭い幻痛が走る。その痛みを感じるたび、私はまだ諦めていないと実感できる。

逢魔が時になると理由も無く一人になりたくなる。

現と常世の境目と呼ばれるけれど、実際に臨死体験をしたとなつてはあながち嘘とも言い切れないわね。

まあ、そのおかげであの子に会えたのだから悪いこととは言えないけど。むしろ素敵な経験ありがとうと言いたい！誰に言うかわからないけどさ！

まあ・・・とにかく、アイツではないことは確かね。

そう、あの時はアイツが居た。

けれどもアイツは好き勝手に動いて・・・。

ふと、後ろでカサリと何が落ちる音が聞こえた。振り向くとそこには、何時だかに何度か見た事がある封筒。

中身は・・・写真と便箋？こ、これは・・・！

写真にはメイド姿のアリスと、同じくメイド服姿の眠り姫が赤い顔で写っていた。アリスが！酔ってるみたいな赤い顔で！ぽけーと！

コレは・・・良い！何が良いつて酔ってるみたいな顔だよ！何よりもアリス！しばらく会ってない間に少し髪伸びたんじゃない？それだけでも私のテンションが・・・テンションが・・・！拙い何か出そう・・・それにしても、コレはお財布に入れてるマイフェイバリットアリスに並べるほどの出来のよさじゃない！

何でか眠り姫の頭の上に刺胞動物が乗っている気がするけど、そんな些細なことはどうでもいい！いつそ2枚とも家宝にしようかな？うんそうしよう！さあ！いざ行かん！何処かわからない我が家へ！

「おおお落ちる落ちるー！」

華麗に中へと明日の一步を踏み出しかけたけれど、何とか屋根にしがみつく。脳内に投身自殺という赤い文字が点滅する。ついでに興奮も冷めた。

・・・ふう。まあ落ち着け私、鼻血は？おーけー、出てない。写真？大丈夫。興奮のあまりに写真に傷でも着いたら本末転倒じゃない。さあ、落ち着いて写真から力を抜きましょう。ええい動け！何故動かん！

何とか震える手で写真を封筒へと戻すと、一緒に入っていた便箋へと目を通す。

中にはただ『寒中見舞い』とだけ書かれており、私が目を通し終わるのを見計らったかのようにバチツと弾けてなくなった。後には火傷と灰だけを残る

わざわざこんな手の込んだことをする奴の心当たりは一人しかないけれど・・・無用の混乱を招くことになりそうだし、メリーさんたちには黙っておこう。

別に黙っていれば写真が独り占め出来るとか、そういう考えは全く無い。断じて無い！まあとりあえずしゃし・・・もとい証拠は懐に仕舞って・・・と。

まあ、なんにしても・・・。

アリスが元氣そうで安心した。

「うひゃおー！」

突如後ろから衝撃が来て、私は屋根と強い出会いを経験する。その代償として傷口やらなにやらから激痛が顔面を駆け抜ける。

激痛から逃れるためにのた打ち回っていると、半身が自由を求めて宙へと躍り出た。脳内で落下死という危険なワードが点滅しながらも、何とか屋根へとしがみついで2度目の生還を果たす。

「こんなとこでなにをしてるのですか！」

私が屋根と感動の再開を果たし、生きている喜びを噛み締めていると、舌つ足らずな声が聞こえてきた。

見れば夕日も沈んで辺りは真っ暗。どうやらいつの間にか常世へと入っていたみたいね。

「お夕飯の時間なのに来ないからメリーさまが困ってるじゃないです……か……？」

私が辺りを見渡してからちびっ子のほうを見ると、何やら驚いた様子で見えるのが見える。何？何度か生死は彷徨ったことあるけど、私は死んで無いわよ？

「う……ごめんなさい……痛かったのですか……？」

何やらおどおどしながら慌てた様子で手をばたばたとさせるちびっ子。何？瀕死の私に止めを刺そうとしているの？そりゃ今襲われたら簡単に逝ける自信はあるけど。

ふと、そこで何やら頬が濡れていることに気付いた。
手を当ててみると液体の感触。舐めるとしょっぱい。

どうやら私は気付かない間に泣いていたらしい。それにしても、正体のわからない液体を迷わず口に運ぶ辺り、我ながら命知らずよね。今に始まったことじゃないけど。

とはいえ、目の前でかしゃかしゃと腕を振り続けているちびっ子はどうしようか……？

見てる分には大変面白いのだけれど、お世辞にも広いとは言えない屋根の上、かしゃかしゃがぼこぼこに代わって私が新世界へと旅立つ事になる可能性も無きにしもあらず。

少し悩んでからちびっ子の前へと移動する。すると奴は何を考え

たのか、目をぎゅっと瞑って下を向いた。

「ふわう……」

私がちびっ子の体を抱きしめると、何やら変な声が聞こえて手のはたはたが再開された。暴れられると……き、傷がががが……。

「よ、よーしよし落ち着けー落ち着けー」

囁きながら背中をさすると、はたはたも静かになって私に身を任せて静かになった。……少し大きくなった？胸的な意味じゃなくて。

「……怒ってないのですか？」

「ごめん、びっくりさせちゃったね？」

「んーん……」

少し頭を振るときゅーつと優しく抱きついてくるちびっ子……もしアリスに見られたりしたら、言い訳できないわね。い、いや、コレには正当な理由があるわけだし下心なんて微塵も無いし！それに！見た目が見た目だし！たぶん大丈夫よね！？うん！大丈夫！……本当に大丈夫？

それにしてもまさか泣いていたとは……。知らなかったけれど涙もろいのかねー、私。

「……もう大丈夫？」

「やー……」

何故か危機を感じて離れようとするも、悲しいことにちびっ子は私に抱きついたまま離れようとしな。子供特有の温もりを感じる

中、私の寿命が縮まらないことをただ祈る。
神様とか信じてないけどさ。

「……」
「……」

無言で抱きついてくるちびっ子の頭を撫で続ける。
それにしても、血生臭くないのかな？

見上げれば忌々しいほどまん丸なお月様。

ふと、あの馬鹿が好きそうだな……とってしまったのはこの
子が居るからか。

「……ルカ」

「んー？」

「願いは……ないのですか？」

「……」

願い……か。

無いといったら嘘だけれど、それは叶うことは無いことだし、叶
えちゃいけないもの。

「ユメ、最初に言ったでしょ？」

少し離れると、ちびっ子と目を合わせている。彼女の黒い眼を見
つめていると、くすくすとアイツが笑う声が聞こえてくる気がする。

「例え願いがあっても、私は叶えて欲しくない」

「そう……ですか」

「それじゃ、もう降りようか」

「うん」

「よし、いい子だ」

にこりと笑うとちびっ子の頭を撫でて立ち上がり、梯子へと手を掛ける。

トントン、と注意深く下を見ながら降りている最中、ふとちびっ子は来ているのか気になって見上げてみる。すると其処に見えたのは可愛らしいクマさん。

これは……。

「……ちびっ子？」

「んー？」

「クマさんパンツは止めときなさい」

「……」

私が指摘をすると、ちびっ子は無言で私を梯子から蹴り落とした。浮遊感漂う数秒間、見上げれば満天の星空と怖い顔のちびっ子が見える。そ、そういうところメリーさんに似てき……

『前略、何処に居るともわからない愛しのアリス。お元気ですか？ 私は屋根から落ち、動くことを禁止された状態のまま早3日が過ぎました。』

今となっては財布に入れてるあなたの写真に、お休みとおはようを言うのだけが私の癒しです。

近頃はすっかり寒くなったので、どうか体調を崩さない様祈ります。

それでは、可能な限り早い再開を願ってます。

ルカより』

などと手紙を書くも、何処に出せばいいのかわからないからどうしようもない。

どうしようもないので、色々と痛む体をこつそりと洗面台まで動かすと火をつける。私の愛よ、アリスへと届け。

「あ……また勝手に動いて！ダメじゃないですかー」

あわよくばそのまま新鮮な外の空気を……等と考えていたら、窓へとたどり着く直前でメリーさんに捕まり布団へと戻される。

「もう、また手紙なんか燃やして！ホントは動けないほどの重症なんですからしつかり療養してください」

「いや……それはちびつ子が……」

「言い訳無用です！」

「……はい」

銀色のポニーテールを揺らしてぶんぶんと怒るメリーさんは、何処か子供っぽくてアリスに似てる気がする。たぶん気のせいなんだけど。

「……なにひてるんでふか？」

「いや、何となく」

特に意味も無くメリーさんの頬をつまむと、大変素敵なジト目で出迎えてくれた。わー、こわい。さてさて、メリー山が爆発しない内にこのやわっこいぽっぺから手を離すことにしましょう。離せ！伸ばそうとするな！二度と立ち上がれない体にされるぞ！

「そうは言っても終始寝たきりじゃ退屈で・・・」

「怪我してるのに勝手に屋根に上って、拳句落ちてた人に自由意志なんてありません!」

「いや・・・それはさ・・・」

「弁解の余地も無いです。大人しくしてれば数日で治っていたはずなのに・・・もう勝手に動いちゃダメですからね!」

「・・・はい」

どう考えても分が悪いので大人しく引き下がる。まあ、死ななかつただけ儲けもん。

そんなこんなでだらけた布団生活を送っていると、メリーさんは立ち上がってドアまで歩いていく。

「お買い物行つて来ますねー」

「あいあい・・・そういえばちびっ子は?」

「んー・・・まだおねむの時間じゃないでしょうか?」

「ふーん・・・」

「ではではー、帰ったらプリン持って来てあげますから、ちゃんと良い子にしてなきゃダメですよ?」

メリーさんはそういつて笑うと部屋から出て行った。プリンか・・・プリン・・・しかし良い子って具体的に何してれば良いんだろう?

天井へと返つてこない問いを向けてみるも、どうやら無口なのか沈黙のまま。もし返つて来たら全力で排除するけど。

天井へとナイフを向けながらぼーっとしていると、隣の部屋から物音がしてきたのでナイフを布団の中へと隠す。

ゆっくりとそちらの方を見れば、眠そうに目を擦ってるちびっ子。

「めりーさまは?」

「買い物、まだ眠いの?」

「うー……」

うーうーと唸りながら、ちびっ子はもそもそと私の布団の中へと潜り込んできた。優しく髪を撫でれば、返ってくるのは静かな寝息。……寝てると普通の子供よね。

穏やかな寝顔を眺めていると、そんな考えが浮かぶ。この子が血まみれになって戦うなんて、誰が想像するんでしょうね。まあ、戦い方を仕込んだ奴は予想してた様だけど。

「かえで……」

「……ふっ」

隣から小さな呟きが聞こえてきた気がしたけれど……気のせいよね？うん、気のせいのはずよ。だってアイツと私が一緒だなんて……考えただけでぞっとする。私、アイツ嫌いだし。

内心そう思うも、行動は変わらずちびっ子の頭を撫で続ける。

何時までも代わりを続ける訳には行かないけれど……せめてその時が来るまでは。

「全く……世知辛い世の中ね」

ポツリとつぶやいた声は誰に届くわけも無く、空中で分解して何処かへと消えていく。

メリーさんが帰ってきたのはそれから暫く経ち、絶えず頭を撫で続ける単純作業に私の腕が悲鳴を上げ始めてからの事だった。

「ただいまー、良い子にしてみましたか？」
「良い子にしてみましたー」

ニコニコ顔で帰ってくるメリーさんにニコニコ顔で返す。
彼女はプリンに乗っているお盆と両手の袋をがさがさと机の上へと置くと、ちびっ子の顔を覗き込んで頬をぶにぶにし始める。

「よく寝てます？」

「うん、寝すぎと言っていていくらい寝てる」

おかげで私の腕に乳酸が溜まりまくっているけど。

「それは何よりです。ではではお待ちかねのプリンたーいむ！」

「わーわーぱちぱちー」

意気揚々と体を起してテーブルへと向かう。ついに・・・ついにこの時が来た！退屈な布団生活に舞い降りた光！つまりプリン！
が！しかし！無情にもテーブルにあるのはプリンだけ！スプーンが無いんだよ！

「あの・・・メリーさん？スプーンは？」

「ここにありませんよー」

いや、見せられても困るんだけど。

メリーさんは楽しそうにその手で持ったスプーンでプリンを掬う。
黄色いソレはとても柔らかそうで美味しそう。コレはアレか？生殺して奴か！？見せるだけ見せて食べさせないって奴！？

しかしメリーさんはそこまで酷くは無かった。ただし、甘くも無かった。

「はい、あーん」

「・・・なにをしていらっしやるのですか？」

何故か私の目の前へと差し出される黄色いお菓子。

「あれ？食べたくないんですか？」

「・・・いや、そうじゃないけど・・・一人で食べれるから
「ダメですよー」

口を開けるたびに進入しようとするスプーンを避けながら言っと、
メリーさんが笑いながら言った。

「ルカさんは怪我人なんですから・・・私が食べさせてあげます！
というわけで、あーん」

「・・・」

思わずその甘い文句に乗りそうになる私。だがしかし！だがしかし！
ーし！

私にはアリスという心に決めた子が居るわけであって・・・プリン
欲しさにホイホイと他の人に口をあけるのか！？もしもそんな光
景をアリスが見たらどう思うか！考えてみたことはあるのか！？

・・・半殺しで済んだらいいな。

つまり断じて私は屈するわけには行かないのである！

「ほらほらー、食べたいんでしょう？美味しいですよー？はい、食
べたいならあーんして下さい」

ニコニコ顔でスプーンを出してくるメリーさんが今は悪魔に見える。
というより、コレ絶対楽しんでるよね？私見て楽しんでるよね

！？いつそ割り切って食べてしまおうか・・・

「あー！プリン食べてるー！」

私が悶々とプリンとアリスとの板ばさみに悩んでいると、布団のほうから声が聞こえてきた。

「ありやりや、起きちゃいましたか」

「ねーねー、ユメの分はないのですか？」

「うむうむ、ちゃんともありますよー。はい、あーん」

「あーん」

何はともあれ、メリーさんの矛先は私からちびっ子へと移ったらしい。その間にスプーンを奪取すると、甘いソレをゆっくりと口へと運ぶ。

ああ・・・至福・・・。

「あ、ルカさん。包帯を替えますから脱いでください」

消毒液やら包帯やらを準備しているメリーさんに言われたので、寝巻きにしている浴衣を脱いでまたプリンを口に運ぶ。傍目には変態にしか見えないこの行動も、プリンの前には無力なのである。

それにしても、一度食べられたら二度目は自分で食べさせるのね。まあ、食べさせながら治療は出来ないから当然だろうけど。

「そーいえばー」

私が半裸のまま黙々とプリンを口へと運んでいると、二つ目へと突入したらしいちびっ子が口周りを汚しながら聞いてきた。ちびっ子よ・・・もっと味わって食べる。

「ルカってペドなのー？」
「っ！」

「ごぶっとプリンを吹き出しそうになるも、気合で押さえつける。
またコイツは……。」

「よしちびっ子、そこに座りなさい。何処でそんなことを聞いてきたのか知らないけれど、いきなりそんなことを言っではいけません
！」

「だってだって、よくちっちゃい子の写真見てるじゃないのですか
！」

み、見られてたのか……。
だ、だけど！何よりもコレだけは言っておかないといけない！

「ちびっ子よ……この子はちっちゃい子に見えるけど、私より年
上なのよ？つまり！私はペドじゃない！」

「そうなのですか？」
「そうなのです！」

ほへー、と写真を見ているちびっ子を見ると、どうやら誤解は解
けたようなので安心してプリンを口に運ぶ。

それにしても誰だ！こいつにそんなことを教えた奴は！

「そうですよーユメさん。ルカさんはペドじゃなくてロリコンって
言っんですよ？」

「ろりこんー？」

「うむうむ、ロリコン。子供好きって意味です」

「ぶむぶむ」

ここに居た……。

子供になんてことを教えてるんだこの人は……。元、人らしいけどさ！

「そういえばー、メリーさまはエウナさまのことが好きですよね」

「へー？」

「だっていつも寝てるエウナさまを見ては……」

「ゆ、ゆゆゆユメさん！そ、そそそそれ以上はダメです！」

ちびっ子があどけない表情でメリーさんの秘密を暴露すると、彼女は不思議な言葉を連呼しながら面白いほど真っ赤になった。

「そうなの？」

「うむむむ！でもでも、エウナさまはどんかんーでいちずーだからメリーさまの気持ちに気付いてないのです」

「ふーん……そうなのー。で、そこのところどう何ですか？メリーさん」

「そ、それはですね……その……えつと……」

面白いので突っ込むと、メリーさんは赤い顔のままもじもじしながら何かを呟いているその間にちびっ子は3つ目のプリンへと手を伸ばし始めた。こいつ……もしかして確信犯？

「そりゃ……す、好きとか嫌いとかでいわれたら……す、す、好きですけど……わ、私としては傍に居られるだけでもいいかな……とですね……い、いえ違います！今の無しです！」

わお、一途にも恋する乙女がここにも一人。

「そそそそうです！おおお薬でしたよね！」

微笑ましい気持ちでその様子を眺めていると、突如メリーさんは消毒液が染み込んだガーゼを私の顔へと叩き付けた。

「目が・・・目があー！」

「わわわ！えつと・・・そのどうしよ・・・あの・・・出来れば両想いだといいなー・・・って・・・」

よほど混乱しているのか要らぬカミングアウトが続行される。

何でもいいから手をどけて！目が痛いから！消毒液染みて来てるから！

「あの・・・その・・・あう・・・」

何とかガーゼから逃れた私が見たものは、真っ赤な顔のメリーさんがぶしゅーと気絶しているところだった。

・・・お互いに苦労してるね。色々と。

「むむー？メリーさん寝ちゃいました？」

全ての元凶はプリンを平らげると、不思議そうにメリーさんを覗き込んでいる。治療は・・・まあ、メリーさんが起きたらでいいか。そう決めて服を着ようとすると、何故か笑顔のちびっ子に止められる。

その瞬間、ものすごく嫌な予感がした。

「しよーがないですから、ユメか代わりに治療してあげるのです！」

「い、いや・・・それはちょっと・・・」

「だいじょーぶです！メリーさんがしているところを何度も見たの

ですから！」

いやいや！そういうのはきちんと知識と技術があつてからする物だから！消毒液掛けるの包帯じゃないから！治療方法違う！

「それに・・・ルカが怪我したのはユメのせいなんですし・・・」
「そ、そう思うならもっと別の方法で償った方がいいんじゃない」
「いえいえ！償えるときに償わないと！何時何が起きるかわからないのです！」

しょぼんとした様子のユメを説得しようとするも効果は見えない。というより、そう思うならそつとしておいて欲しいと切に願う。
拙い・・・このままだととても拙いことになる・・・！

「あ・・・ダメなのですよー！」
「ひっ・・・」

その自分の直感を信じ、四つんばいで部屋から逃げ出そうとするけど、無情にも足を掴まれる。何とか其処に踏ん張ろうとするも所詮怪我人、抵抗空しくずると元居た場所へと引きずられる。

これは・・・腹を括るしかないか。

「さあさあ！ユメを信じてください！」

ユメはドアに鍵を掛けると、素手で包帯を千切りながら満面の笑みでいった。

今、私の生死を賭けた戦いが開かれる！

治療は用法用量を守れる正しい人にして貰いましょう(後書き)

数時間後、其処には何も反応しなくなったルカの姿が・・・!

礼によって例の如く、今回も誤字チェックが甘いです
自前だとしても甘くなっちゃうんだね

ちなみに、本作品は一度没になった話を改変して出しています
たまに文脈が変なことがあるかもしれないですがスルーしていてく
ださい

最近作者が情緒不安定気味であまり安定しておらず、執筆が上手く
進みません・・・
少しずつでも進めて行くつもりですので、待っていただけの方はだ
らりとお待ちください

では、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

それでも私は走り続ける(前書き)

我が家には3匹のペットが居るんですが・・・
アロワナと、ナマズと、にゃんこで、それぞれ
ちびと、ナマズと、毛玉、という名前が付けられています
ちなみにアロワナはアロワナとも呼ばれています

こうして見ると・・・なるほど私の作品に名前付きキャラが少ない
わけですね・・・

人物表

エウナ
吸血鬼 隠された嗜好が今明かされる・・・！かも さて、どっち
がぞっこんでしょう

楓

魔法使い けもみみ巫女さん 全作通しての便利屋さん

アリス・イン・ワンダーランド

魔術師 恋人はルカ ヒロイン？ええ、そんな時期もありました

ミツキ

クラゲ まいふえいばりつときやら いつかメインの話を書きたい

今回は基本人型です

それでも私は走り続ける

居間に首を突っ込んで誰もいないことを確認してから、抜き足差し足で忍び寄る。電気は付けない。別に付けても付けなくても視界に問題ないし、コレといってやましいことをしようというわけでもない。

何かが音を立て無いかと耳を澄ましながらも、なるべく素早く、音を立てないようにしてソファに座る。

アリスはまだ寝てる様子。良く絡んでくる紅白のあの子は肝心なときに居ないし、別に肝心でないときにも居ない。相変わらず何をしてるのかわからない子ね。

そもそも、居たら絡んでくるからすぐにわかるでしょうし。

ということと今現在は私の天下とも言える！つまり今なら何をしても何も言われない。

何かが聞こえてくるたびにピクツと動きの止まる自分へ鼓舞しながら、後ろでに隠しておいた本をテーブルの上へと置く。タイトルは『なめくじとカタツムリの戦い』だけれど、内容は180度を通り越すほど違う。何でもこのなめツムリは大ベストセラーらしく、この本の隣に置いてあった。まあ、大きさが一緒なら何でも良かったんだけど・・・何らかの意図を感じる気がする。というより嫌がらせ？

表紙を捲って現れた本当のタイトルは、メイドさんの奮戦。ドジなメイドさんが主人のために日々がんばる話を書いたほのぼのストーリー・・・とか何とか。

あまりにも人気が無さ過ぎて小売店はもちろんのこと、大型の本屋にも置いていないのという絶滅危惧種状態の本だけれど、本屋に並んでも2冊ほど凹んだままで何時までも放置され続けている様な本だけれど・・・そこには数秒前までべたべたしてたのに突然スイッチが切れた様にして冷たくなる巫女服の少女も、お酒を飲んだだ

けで意味不明の行動を始める魔術師もいない。ただあるのは夢だけ！そう、夢だけ！桃源郷はここにあり。ただ・・・あまり知人に見せたくないのが欠点ね。

扉絵をぺらぺらと捲れば、其処には白黒で書かれたメイドさんが見える。普通扉絵といったらカラーなのだけれど、この本は違う。何でもカラーにすると赤字が加速したとかで、初版だけで哀しみを背負ったらしい。まあ、カラーもモノクロもさほど違いは無いような気がするのだけれど。

高鳴る己を抑えながら、表情筋に力を入れてゆつくりとページを捲っていく。私は読むのは早くないから・・・読めるときに読み進めたいところ。

静かな夜の部屋、驚くほど穏やかな時間が流れる。

「へー、エウナさんってこういうの読むんですか」

私の真後ろで誰かの声がした。

ぎぎぎと音が鳴りそうなきこちなさでそちらを向くと、アリスが私の読んでいる本を覗き込んでいる。間の悪いことに開かれたページはちょうど挿絵の部分。もしくは挿絵に入ったから声を掛けたのかしらね？

ちようどいい塩梅に意識は目の前の本に向けられていて、こちらにはあまり気を配ってない様子。

・・・よし、消すか。

結論を出すと右手を叩き込む。けれども、期待していた手ごたえは無く、振りぬいた拳は空しく空だけを叩く。

「い、いきなりはダメだとお姉さん思いますよ！」

「大丈夫、少しばかり違う世界が見えるだけだから」

「それ絶対大丈夫じゃないと思います！」

ソファの後ろで倒れているアリス目掛けて倒れこみながら入れた肘打ちは、転がって避けられる。しょうがないので、そのまま回転を利用して踵落としを狙う。

右足が何かをぶち抜く手ごたえと一緒に、数秒前まで床だった何かが辺りに散らばる。

「ひゃあ！」

悲鳴を上げながらもコロコロと転がって私と距離を取るアリス。それにしても・・・インドア派だと思っていたけれど、意外としぶといわね。

なら、もう少しだけ本気で動いていいかな？

「ちょ、ちょっと待ってください！本がどうなってもいいんですけど！」

「・・・」

アリスの言葉で動きそうになった体を強引に止める。ちらりと後ろを見れば、細長い竜が本の近くに居るのが見える。

先に・・・あっちか。

「ま、まずは話し合いをですね・・・ひっ！」

何かを言っているアリスを無視して後ろに跳ぶと、邪魔な竜の首を握りつぶす。断面から赤い何かが溢れ出て、暗かった部屋の中に鮮やかな色を付けていく。

「・・・で、本がどうしたって？」

「そ、そのですねー」

アリスへとにつこりと微笑みかけると、彼女は乾いたような笑いを浮かべて固まっている。特に利用価値も思いつかないので手の中にあるものを床に投げ捨てると、べしゃっと湿った音を立てた。

「と、とりあえず落ち着きませんか？」

「あら、私は冷静よ？」

頭で問題ないかしら？ 当たり所が悪くない限り死ぬことは無いでしょうし。後遺症が残ったら・・・まあそのときはそのときで。

狙いを定めながら一歩、また一歩とアリスへと近づけば彼女もまた一歩ずつ後ろへと下がる。永遠に縮まらないかと思えた二人の距離は、アリスの背中が壁に当たることで終わりを告げた。

「覚悟はいい？ 大丈夫、たぶん死ぬことは無いと思うから」

「思っんじゃ嫌です！」

そう・・・それは残念ね。

「あ、楓さんだ」

「っ！？」

アリスがそう言った瞬間に振りかぶっていた腕を戻すと、出来る限りの速度で本へと駆け寄る。そのまま本をソファの下に隠すと、出来る限りの笑顔を作って後ろを振り向く。

「お帰りなさい楓、早かったのね」

私の視線の先には、窓から差し込む月明かりが優しく降り注いでいた。

「と、思いましたけど・・・気のせいだったみたいですね」

背中の方から、とぼけたアリスの声が聞こえる。こ、こいつ・・・。

とはいえ、今の一言で冷静になってしまったのも事実。見られてしまったものはしょうがないし、ここは開き直る・・・しか無いか。

「落ち着きました？」

「・・・一発殴っていい？」

「やめてください死んでしまいます」

「・・・」

にへら、とした顔を見てると完全に戦意が無くなった。ついでにやる気も無くなってソファにだらりと座り込む。

「まあまあ、そう落ち込まないで・・・想像してみてくださいな」

「・・・何よ」

ニコニコしながら覗き込んでくるアリスを睨むも、いまいち効果は出ない。

「メイドさん、あなただけのメイドさんをです」

私だけのメイド？そうね・・・。

小柄で精一杯だけど少しドジなのがいいわね。うん、決して完璧鉄面皮で黙っていると人形と区別がつかなくなる様な子じゃなくて、表情豊かで喜怒哀楽がはつきりしてる子。

それでお茶の時間とか何かになるとトテテテーって走ってきて、私が危ないと思った時には転んでしまう。

慌てること無いのに、言うとき少し涙目になりながら『こ、ごめん

なさい・・・』って言うの！

けれど笑いながら頭を撫でてあげると、少し照れたような顔でぴとっと抱きついて、小さく『えへへー』とか聞こえてくる・・・。

コレは・・・いいっ！すごいっ！それでそれで・・・

「えへへー・・・」

「・・・」

けれども、私の妄想は目の前のアリスの顔を見て一瞬で冷めた。わ、私もあんな顔してたのかしら・・・？

「アリス、あなた相当締まりの無い顔になってるわよ・・・」

「・・・エウナさんこそ、能面みたいですよ」

にやけるのを我慢してるんだからしょうがないでしょう。

その後、二人して深呼吸をして落ち着くと、なんとも居心地の悪い空気が部屋の中を支配する。

「そ、それはともかくですね・・・」

どうやら自分で振ったくせにこの話は流すことにしたらしい。

「私みたいな人はともかくとして、エウナさんには楓さんがいるじゃないですか」

今となってはもう見たくも無いほど忌々しい教科書をかき集めながら、不思議そうにアリスが言う。

「彼女ならエウナさんが望めば、メイドさんの1度や2度くらいしてくれると思うんですが・・・違うんですか？」

「それは・・・」

たぶん、してくれるでしょう。

けれど私にはわかる。何故かわからないけれどわかるのだ！

あの子がメイドをするときは、喜怒哀楽が全くわからない鉄面皮で、黙っている人形かどうかの区別がつかなくなるようなメイドになると！

それ私の求めているのと違うから！いや嬉しいけど！もっと・・・
こう・・・！

「ふーん・・・贅沢なんですね・・・」

私が言葉に出来ない魂の叫びをあげていると、何かを察したようで冷めた視線をプレゼントされた。

哀しみから逃れるべく、無言で立ち上がって窓を開けると、私を優しい月明かりが出迎えてくれる。

ああ・・・今日は月が綺麗ね。

「何が悪いのよおおおおおおおお！」

ビシッと振り向き様にアリスを指差すと、そのまま外へと飛び出す。

別に行きたい所なんて無いけれど、今は何処へなりとも走りたい気分。

エウナが謎のポーズを決めて走り去ったことを確認してから、少

女はソファの下をこそごそと漁り始める。

そして目的のものが見つかったらしく、1冊の本を手に取るとソファに座り、巻数を確認した。

「あ、これ新刊じゃないですか・・・何処で買ったんでしょう」

一人呟くと、少女はにやけていく顔を時折引き締めながらページを捲る。

何となく夜中の街を走る。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。とか何とか言った人もいたらしいけど、私の隣にはセリヌンティウスの弟子は居ないし、止められたら素直に止まる自信がある。ところで、私は何で走ってるんだろ？

夜空にはあの子が好きそうなまん丸なお月様。アレを美味しそうと言ったのは何時だった？

月に近づこう何て思っても無いけれど、強く地面を蹴って空高く跳ぶ。誰かさん家の屋根の上へと不法侵入してみれば、目の前には建設途中のまま放置されてる塔の姿。バベルの塔は届かず壊れたけど、この塔は何処まで伸ばすつもりなんでしょうね。何にしても、私が好きになることはなさそう。

そこでふと、アリスの家に楓が帰ってきてお土産を見せびらかしている光景が見えた。

『お買い物のとちゅうでケーキ買ってきたんですよ』

『それはそれは、早速食べましょうか』

『んー？エウナさんは？』

『エウナさんは・・・たぶん要らないでしょうし、3人で食べましよう』

『あいあいー』

気のせいかな声まで聞こえてくる。それにしても・・・。

「随分勝手なこと言うわね・・・」

一人呟いて帰り道を急ぐ。早くしないとケーキが・・・ケーキが！というより、あのクラゲは人として数えていいの！？そんなことより私を呼べよ！呼べるんだから！

色々な事を考えながらも足はフル回転。今、私は風になる。

家の前でドリフトを決めながらドアへと駆け寄り、勢いを殺さずにそのまま開け放つ。なにやらバキンとか不吉な音がした様な気がしたけれど、全力で見なかったことにする。今は何よりも私も食べるといふ事を知らせなければ！

「ちよつと！私も食べるわよ！」

片手が空いてないので、もう片方の手でドアを開け放して叫びながら駆け込むと、それぞれの反応が返ってきた。アリスは驚いたようにして目を丸くしながら固まっているし、楓は私に来るのがわかっていたみたいにくすくすと笑っている。クラゲは何を考えてるのが良くわからないけど。

そして硬直が溶けていく様に、アリスの視線がゆっくりと私の手のほうへと移っていく。それに釣られて、私の視線も先ほどから何かを握り締めたままの自身の手へと向かう。

そこにはドアノブと、なにやら見覚えのあるドアだったであろう物体があった。うん、どう見ても玄関のドアね。い、何時の間にか外れたのかしら？

ゴン、と私の手からドアの残骸が落ちる音が静かな居間に響く。

「・・・楓さん」

「んー？」

「ケーキを食べるのなら、紅茶を淹れてきてくれませんか？」

「はいなー」

硬直している私を気にもせず、楓がクラゲを頭に乘せてトテテテ
ーと居間から出て行く。

それを確認してから、アリスはにっこりと微笑んだ。

私は反射的に屈むと、正座をしてアリスへと頭を垂れる。最後に
土下座したのって・・・覗きがばれたとき？何にしても、未だ一連
の流れに衰えが見れないのは哀しむべきか嬉しく思うべきか。

「あらあら、いきなり土下座なんてして・・・どうしたんですか？」

心の中で嘆いてると、頭の上でアリスの声があった。気のせいかな今
ので室温が数度下がった気がするけど・・・もしかして怒ってない？
けれども頭を上げれば、其処にはとても綺麗に微笑むアリスさん
のお姿。全力で地面と向き合うことにする。上を向いて歩けないと
きも時にはある。

「私ね、言いましたよね？」

「・・・」

私が何も喋れない間にも、アリスは話を続ける。

「ドアを開ける時は壊さないように注意して・・・ってちゃんと
言いましたよね？」

「・・・はい」

「今が夏とかなら別にいいんですよ？ドアが無いのは少し見栄えが悪いですが、風通しが良くなったくらいで死ぬことは無いですからですけど、今は冬ですよね？」

「・・・」

「真冬になろうというこの時期、どうしてエウナさんはドアをぶち抜いて来るんですか！」

静かなアリスの声と同時に蹴り上げられると、腰に何かを抱きついてきた。見れば竜が私に熱いハグをしたまま、キリキリと万力の如く力を込めてくる。

「そういえば、エウナさんって吸血鬼でしたよね？なら骨の1本や2本、何の問題も無いですよね？」

「い、1本や2本じゃすまな・・・」

満足に声も出せないまま、激痛と一緒にゴキッとした音で私の体は崩れ落ちた。

「全く、これからは気を付けてくださいね？」

「・・・」

「あれれ？返事が無いですね？それじゃもつい・・・」

「は、はい・・・気をつけます・・・」

何とか返事をしようとする、蚊の鳴くような声しか出なかった。それでも許してもらえたのか、竜が消えたのでやっと安堵する。

何はともあれ、安静にしてれば勝手に治るでしょ。

激痛の過ぎ去る時をひたすら大人しく待っていると、ドアを開けて楓とミツキが入ってきた。ミツキのお盆にはティーポットとカップ。楓のお盆には・・・ワインとスポーツドリンク？

二人とも、倒れたままなるべく動かない様になっている私を不思議

そつに見つめながらも、テーブルへとお盆を置く。
き、気のせいであって欲しいけど、アリスがにっこりと微笑んだ
ような気がした。

「楓さん楓さん」

「んにー？」

「エウナさんが抱きしめて欲しいって言ってましたよ」

こ、こいつ・・・なんてことを言うんだ！

アリスの言葉を聞くや否や、狐耳を動かして全身で喜びを表す楓。

「ちょ、ちょっと待ちなさ・・・」

制止の声は届いているのかいないのか、彼女は嬉しそうにぱたぱたとコートを揺らして駆けてくる。・・・悲鳴が出るのだけは何とか堪えるべく、歯を食いしばって来るべき瞬間に備えよう。

「早速だけど、王様ゲームをしようと思うの」

無事骨もくつつき復活すると、ずっと考えていた計画を実行すべく発言する。

「はい？」

「王様ゲームをしようと・・・」

「王様ゲーム・・・ですか？」

「そう、王様ゲーム」

「・・・」

アリスから何か可哀そうなものを見るような視線が帰ってきたけれど、くじけちゃダメよ私。とりあえず、アリスへと話しかけるのはこわ・・・無駄だと知ったので楓に聞いてみる。

「楓はしたいよねー？」

「嫌です」

「そ、そう・・・」

即答された・・・。

楓に即答された・・・。

嫌ですって楓に即答された・・・。

「ま、まあまあ楓さん、そう一言で切り捨てなくても・・・」
「嫌です」

あまりに見てられなかったのか、アリスがフォローしているのが何処か遠く聞こえてくる。

けれども、ミツキが私の体をぺしぺしはたいてきた事によって私の意識は復活する。そうだ・・・なにをしているのだ私は！

「ということ、王様ゲームをしましょうか」

「エウナさんは少し黙ってください。いいですか？楓さん、いくらエウナさんが変なことを言ったからと言ってでもですね・・・」
「・・・」

ふ、ふふ、今日は月が綺麗ね。

窓から月を見上げて思わず現実逃避をすると、ミツキが労わるかのようにドレスを引っ張ってきた。お返しに私も頭の上へと手を伸

ばして彼女の頭をなでると、気持ちよさげに目を細める。ああ、今はあなただけが私の癒しね。

「ほら、ちゃんとごめんなさいして」
「ごめんなさい・・・」

暫らく二人だけの世界に浸っていると、話が済んだらしく楓が頭を下げてきた。しょんぼりとした頭を見ていると、何故か申し訳なく思えてくる。

「私は気にしてないからいいわよ、それよりアリス？」
「はいはい、王様ゲームですね。それじゃ準備してきますから、ちゃんといい子で待っていてください」

呆れた様な顔のままアリスが居間から出て行くと、ぴとーっと楓が引っ付いてきた。ぴよこぴよここと耳が何かを訴えるようにして動く。

「ん？」
「なでなでー？」
「ああはいはい、なでなでー」
「んー」

どうしてか判らないけれど、楓を撫で始めるとミツキは身を引くようにして離れていった。

けれども私は忘れていたのだ。

この子とする王様ゲームがどういつことになるのかを。

『王様だーれだ』

気合を入れて目の前の棒を引き抜くと・・・無情にも3の数字。これで都合6回目、未だに私に当たりは来ない。

自分が当たりじゃないことがわかると、次に気になるのは王様になったのが誰かということ。

見れば、アリスが赤色の棒を握り締めているのが見えて、無意識に安堵の息を吐く。

「・・・それじゃ、3番が1番にケーキを食べさせてください」

あまりの平和さに思わず涙が出そうになりながら、楓の口にケーキを運ぶ。

「はい、あーん」

「あーん・・・んむ・・・」

その際にきちんと汚れた口周りを拭いてあげるのも忘れない・・・何か言いたげな視線が私に向けられてる様な気がするのは何でなのかしらね？

「それじゃ7回目、行きますよー」

命令が終わると、王様アリスの掛け声で次のゲームが始まる。終わりが無いということでゲームは10回戦まで、つまりチャンスはあと3回。

『王様だーれだ』

それにしても、この掛け声に意味はあるの？とか思いながら抜いた番号は・・・また3番。

けれど憤るよりも先に確認したいのは王様が誰か。もしもあの子に渡ったら・・・。

「今回はボクみたいですなー」

嬉しそうにっこにこしながら赤い棒を振り回しているのは、本日4度目の王様となる楓さん。ちなみに、アリスが2回、ミツキが1回、王様になった。私には一度も来てない・・・しかも王様は来なくせに、当てられる回数はトップという意味不明な状況。

「ではでは、2番さん」

どうやらアリスが当たったらしく、表情が強張る。

「腹筋100回で」

これでアリスが本日の腹筋レースへの参加を飾ることになった。トップとの差は約3倍！果たして追いつけるのか！まあ、追いつくには残りの王様を全部楓が取って、全部アリスに当てるしかないけれど。

最後の方は息も絶え絶えになりながら腹筋を続けるアリス。その姿はとても感動的だけれど、ここに居る面子に感動を期待するのは無謀ね。

「ひゃ、ひゃーく・・・」

「うむうむ、ではでは8回目ー」

「す、少し休ませ・・・」

『王様だーれだ』

敗者の言葉は無情にも無視され、次のゲームがスタートする。

引いた手元には見慣れた数字、そろそろ赤い子が来てもいいのよ？
王様はミツキで、紙に書いた文字は「一気飲み」だった。平和・
・に見えるかもしれないこの命令だけど・・・一気飲みする対象が
アリスなのよね。それにしても・・・それぞれほぼ同じ命令しか出
さないわね。

ソレはもう、ほとんど気力だけでしているかのような見事な一気
飲みを見せてくれるアリスさん。全てが終わったときにはスポーツ
飲料をごくごくして、真っ赤な顔が出来上がり。アレ？お酒にスポ
ーツ飲料って平気だったっけ・・・？

『王様だーれだ』

疑問を持つ間にもゲームは進んで早9回目。これで残すところ王
様ゲームは後1回・・・なのに・・・何で！何で王様が来ないのよ！
見れば王様は赤い顔のアリスだった。赤色が赤色を呼んだのかし
らね？そう考えると、楓の王様が多いのも納得できる。

「わたしが・・・おーさまですわねー」

「ちよ、ちよっとアリス・・・大丈夫？」

「だーいじょーぶです！それじゃ1番ー！」

そう言いながら何故か楓を指差すアリス。どう見ても大丈夫に見
えないのだけど・・・。

「犬になってくださいー！」

「・・・」

その瞬間、確かに室内の時間は凍りついた。確かに楓の頭にあるのは狐の耳だし、狐は犬と言ってもいいかもしれない！でも・・・それはどうなの？色々。

一番最初に解凍されたミツキが素早く動くと、楓の首へと首輪を付ける。そしてそのまま首から伸びている紐を・・・な、何で私に渡すのかしら？

アリスはその光景を満足そうにうむうむと一人頷くと、続ける。

「ではでは、鳴いて貰いませよー！わんわん」

「・・・」

少しの沈黙の後、楓の首がゆっくりと、少しずつ紐の先を辿っていく。やがてその視線は私で止まり、能面の様な笑顔をこちらに向けていらっしやる。え・・・？私！？私が悪いの？

「・・・わん」

こ、コレは・・・！

思わず楓から視線を外すと天井を見上げて、溢れ出そうになる何かを堪える。お・・・落ち着け、落ち着くのよ私。冷静になれ。そうよ、いつもの楓に首輪が付いただけじゃない。うん、何も問題は無いわ。背徳的な感じが何ともたまらな・・・オーケー？オーケー。うん、オーケー。首輪一つでココまで変わるのね。それにまだ直接的な接触は無いじゃない。うん、大丈夫、大丈夫・・・今日は楓はつけてたっけ？うん、うん・・・？もしつけてないと胸の感触が直に・・・。

「ひゃう！」

突然やわっこいものが体に抱き付いてきて思わず声が出た。見れ

ば首輪を付け、けもみみを嬉しそうに揺らしている楓さんが私の腕に抱きついていてるのではないか！そしてふにふにと腕に当たると何か。

思わぬ緊急事態に私が抱きしめるか否かで片手を上げたり下げたりしている間に、楓は少しだけ背伸びをすると、ちゅっと唇に柔らかい感触を残して離れた。

ふ・・・ふふふ。

「おー！」

何処か遠くで誰かが歓声を上げている声が聞こえる。

「アラヤダもうコンナ時間じゃない。さ、遊びはココまでにして今日は、ね、寝ましようか」

「わう」

ぼーっとする頭で何とかそれだけを搾り出して部屋から出ようと歩き出すと、楓はくるくると私の周りを回って付いてくる。ふふ・・・いい子ね・・・。

「そ、ソレジャ私たちはもう寝・・・」

笑顔でお別れを告げようと振り向くと、素早く駆け寄ってきたミツキの蹴りが私の脛を直撃する。

「べ・・・べんけえ・・・」

あまりの痛さに蹲ると口から変な電波が発信される。その間に楓は元居た場所にトテテテーと戻ってしまった。思わず視線を上げると、とても素敵なミツキさんの冷たい視線を視界の端で捉えたので、大人しく地面と見つめ合って脛の痛みに耐える。さりげなくド

レスを上げて脛を確認すると、悲しいことに青白く痣になってる。
ヒビ・・・で済んでたらいいな。

「ではではー、第10回ー。王様だーれだー」

未だ立ち上がれないままにいる私を無視して、能天気なアリスの
声が部屋の中に響き渡る。幸か不幸か、痛みで本来の目的を思い出
したので、気合で立ち上がると棒へと手を伸ばす。

その気合が呼び寄せたのか、どうなのか、私の手元へと滑り込む
赤い印。ついに・・・ついにこの時が来た！

意味のわからない腹筋をさせられ・・・他人にケーキを食べさせ
てあげ・・・さらに脛の骨までやられる・・・そんな私にもついに
光が！

私は王様の印である赤い棒を掲げると、高らかに宣言してゲーム
セットとなった。

「全員メイド服ね！」

かくして私の願いは叶えられた。けれども、誤算が一つだけ・・・

「何で私のスカートこんなに短いのよ・・・かなり寒いんだけど・・・

「。しよーがないじゃないですか、エウナさんの大きさに合うメイド
服が無かったんですから」

「ですよー、我俣はめー！」

メイドさん二人に言われて思わず黙り込む。

全員メイド服・・・悲しい事にこの言葉には当然ながら私も含まれていて、そしてさらに悲しい事に私に合うサイズの服が何故かミニスカートの物しかなく、せつかくだから写真撮影しましょうか！という楓の一言で雪の降る寒空の下にミニスカートという格好で震えることに・・・。

まあ・・・それはともかくとして・・・。

目の前には楓とアリス。二人とも同じメイド服のだけれど、楓はしっかりとした雰囲気だしアリスは何処かドジな感じがする。ああ・・・眼福。惜しむべきは、楓が赤いコートを着込んだままということかしらね。

ちなみにミツキはゲームが終わるとすぐにクラゲに戻り、私の頭に居座って動かない。

「ではでは、撮りますから並んで下さいな」

「あなたは写らないの？」

「ボクは記憶に残るのはいいですが、記録に残るのは嫌なのです」

「・・・どういうこと？」

「まあまあー、雪も降ってますし、早く撮りましょうー！」

「おー！」

まあ、楓の言っていることがよくわからないのは今に始まった事じゃないし、寒いのは同意なのでアリスの隣に並ぶ。

「さぶさぶ・・・」

するとこの酔っ払いは何を考えたのか、突然私の腕に抱きついてきた。

「ちよ、ちよつとアリス！離れなさい！」
「ぬくぬくー」

何故か顔に熱が集まっていくのを自覚しながら慌てて引き剥がそうとするも、酔っ払いは至福の表情で離れようとしなない。

「・・・動かないで下さいね」

冷たさを感じる声と一緒にパシャツとフラッシュが点滅すると、カメラから写真が吐き出される。か、カメラからの視線が怖い・・・何はともあれコレで家に戻れ・・・。

「ひっ・・・！」

アリスをくつつけたままで、意気揚々と開け放されたドアから家へと戻ろうとすると、短刀が私の頭の横を掠めて壁に突き刺さった。

「・・・もう一枚撮りますからこっち向いてください」

「は、はい」

と、とにかく今は逆らわないほうがいいわね・・・。
元に戻ると楓のほうをゆっくりと振り向いて固まる。すると今度は無言でカメラのフラッシュが焚かれた。

「はい、こっちがエウナさんの分です」

「んー？」

難は去ったのか、それとも何か考えているのか、ニコニコと笑顔で差し出された写真には、メイド服を着た赤い顔のアリスが同じくメイド服を着ている私に抱きついて写っている。笑顔のア

リスとは対照的に、私の顔が引き攣って見えるのは気のせいじゃないでしょう。

「あれ？もう一枚のは？」

「あつちは寒中見舞いで送ります」

寒中見舞い・・・？誰か送る相手なんていたっけ？

送る相手について想いを巡らせていると、楓がそれにしても・・・と続ける。

「お二人とも、仲がよろしいんですね」

「へ・・・？」

楓はさっきまでの表情とは一転した無表情で言い放つ。その差に頭が追いつかないで固まっていると、今や来るもの拒まずとなった家へと入っていくメイドさん。

「ちょ、ちょっと待って楓！」

如何にしてあの子の機嫌を回復させるべきか、知恵を総動員させながらも、慌てて楓の後を追った。

今となつては誰も居ない、もう朽ちかけている屋敷のテラスに一人の少女が居た。少女は鮮血を思わせる真っ赤なコートと巫女服に身を包むと、無表情のまま一人で空を見上げ歌を歌う。

「とーりゃんせー・・・とーりゃんせー・・・」

やがて少女は空から視線を落とすと、一枚の写真を手元から取り出す。

三日月の下、少女はじつと写真を見つめる。しばらくの間無言で見つめていた少女は、その写真を愛おしそうに一撫ですると、手元の赤い封筒へと入れる。

そしてそのまま封筒を地面へと置くと、ペンダントを一振りして杖へと変えて、封筒をトンと突いた。

封筒に浮かび上がるピンポン玉ほどの大きさの火。けれどもそのピンポン玉は大きくなり、封筒を飲み込んで灰だけを残す。

すると、風も無いのに灰が舞い上がっていく。

灰の行く末を見つめると、無表情のままだった少女はくすくすと笑った。

「行きはよいよい・・・帰りはこわい・・・」

それでも私は走り続ける(後書き)

私にしては珍しく月末での投稿！

うんまあ・・・毎度毎度前書きにいちいちネタなんて思いつかないですよ

(< >) < > < > (< >) < > (ドードリオ！とか考えてました！

ポケモン楽しいですよー

私はライトなので固体値とか気にせず好きな子使って殿堂入りまでがんばってます

ギギギアルが好きでした
それでもダルマなら・・・ダルマなら何とかしてくれる・・・！

さてさて、次回予告でもしようかなーと思った次第ですが・・・予告って難しいね

およそ予定通りなら次回は告白回になります
例によって例の如く、告白回と言っても甘くなる予定ないから！
あくまで基本ほのぼの、たまに殺伐を目指してます

ちなみに二人とも正式な告白はしてないです
つまりまだカップルじゃないんだよ！

次の話は決まっていますから中の人のMP次第でそれなりに早く書けるはず？

話に関するメモ書きが0なのが少し気になりますが・・・

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1963w/>

あなたは笑ってくれますか？

2011年11月29日02時04分発行